

熊本県子どもの生活に関する実態調査
調 査 報 告 書（宇土市概要版）

平成３０年１１月
宇土市

目 次

はじめに

はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2

I 調査概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2

II 調査結果（属性）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6

III 調査結果分析，課題と方向性

1. 経済状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9

2. 生活環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 16

3. 教育環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 41

4. 社会環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 49

IV まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 52

はじめに

<はじめに>

熊本県子どもの生活に関する実態調査 調査報告書宇土市概要版について

・宇土市の小学校 5 年生と中学校 2 年生の子ども及びその保護者に対し、「子どもの生活に関する実態調査」を実施し、結果を集計した。宇土市では、本調査において、Ⅰ層が 11.5% (42 人)、Ⅱ層が 88.5% (322 人) であった¹。また、Ⅰ層のうち 52.4% (22 人) がひとり親世帯であった。

・本報告書は、調査結果のうち、宇土市で特徴的な回答であると思われるものについて取り上げ、傾向をまとめた。

I 調査概要

調査目的

熊本県では、「子どもの貧困対策の推進に関する法律」に基づき、平成 27 年 3 月に子どもの貧困対策計画（以下「県計画」という。）を策定し、①教育の支援、②生活の支援、③保護者に対する就労支援、④経済的支援を 4 つの柱として、貧困が世代を超えて連鎖することのないよう、子どもの貧困対策に取り組んでいます。

宇土市においても、平成 29 年度に「宇土市子どもの貧困対策庁内連絡会」を組織し、子どもに関する業務を担当する部署が連携し、支援が必要な子どもや世帯に関する施策を整理したところです。

県においては、県計画の実効性を高めるとともに各市町村の取り組みを支援するため、熊本市を除く全市町村における子どもの生活実態調査が行われ、結果が公表されるところです。

今回、この調査で回収された宇土市のデータをもとに集計しました。

調査対象者

宇土市立小学校 5 年生の子ども及び保護者、同中学校 2 年生の子ども及び保護者

調査内容 別添「熊本県子どもの生活に関する実態調査 調査票」のとおり

¹熊本県における同様の調査に基づき、保護者の調査票の問 2-1（世帯人数）及び問 15（世帯合計所得）のいずれも回答した件数を母数とし、貧困線を下回る層をⅠ層、それ以外をⅡ層として世帯を分類した。割合については、小数点第 2 位以下を四捨五入している。

調査方法

- ・調査票は市町村を通じ各学校に配布し、各学校から調査対象者に配布
- ・調査対象者は、記入した調査票を各学校に提出し、各学校は提出された調査票を取りまとめのうえ、市を通じて県に送付
- ・県は調査データを検討・分析し、市町村に調査結果を提供

調査期間 平成 29 年 6 月 12 日（月）～平成 29 年 7 月 12 日（水）

回収状況

		対象者数	回答数	市の回答率(%)	県の回答率(%)
小学校 5 年生	保護者	325	228	70.2	75.4
	子ども	325	230	70.8	75.6
	計	650	458	70.5	75.5
中学校 2 年生	保護者	305	175	57.4	69.2
	子ども	305	175	57.4	69.4
	計	610	350	57.4	69.3
不明	保護者		23		
	子ども		22		
	計		45		
全体	保護者	630	426	67.6	75.8
	子ども	630	427	67.8	75.6
	計	1260	853	67.7	75.7
世帯集計		630	428	67.9	

対象者数… 配布数 県中間報告と一致

回答数… 県からのデータ数による

428 世帯回収 うち、親のみの回収 1 世帯、中学生の子のみの回収 2 世帯

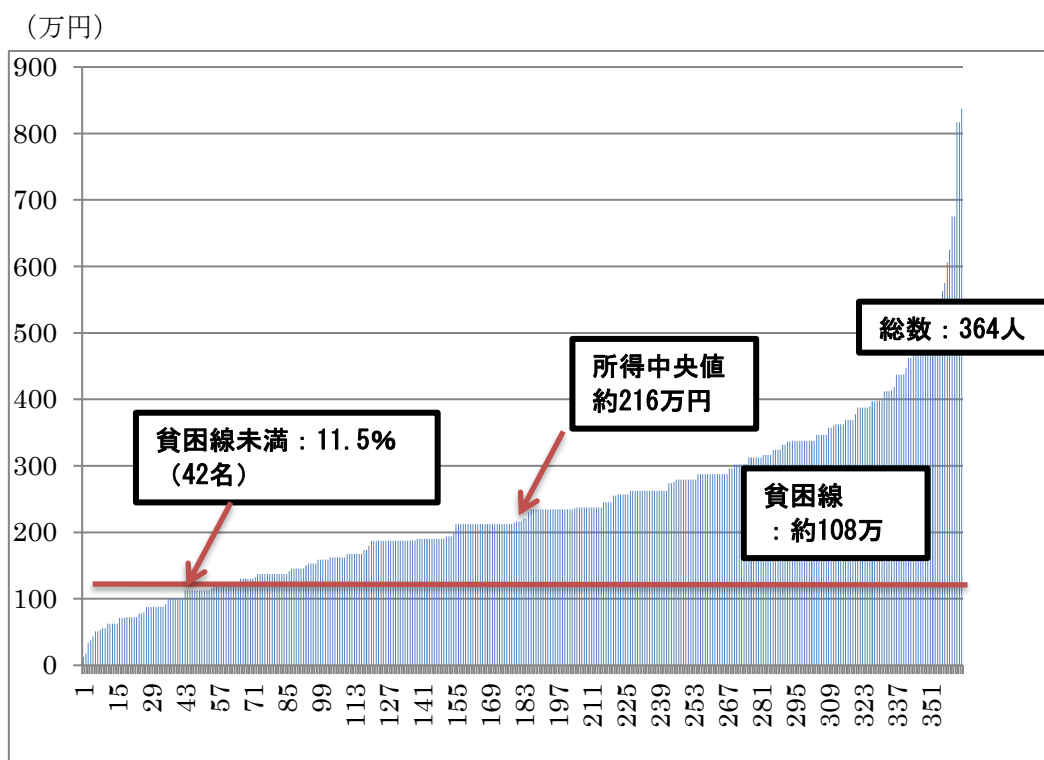
※ 1 表中の「不明・子ども」の場合、調査票への記入に際して小学生又は中学生の選択がなかった回答者をいう。また、「不明・保護者」の場合、相対する子が前者の場合に加えて、保護者のみの回答のため子の小中学校の別が不明のものをいう。

※ 2 回答率は小数第 2 位を四捨五入

相対的貧困率

本調査において世帯全員を合わせた所得を調査しているが、当該所得のみで世帯の困窮状態を測ることはできず、多面的に測る指標として、国民生活基礎調査における相対的貧困率の算出手法に沿って、「等価可処分所得」及びそれを基に区分した困窮度を用いている。

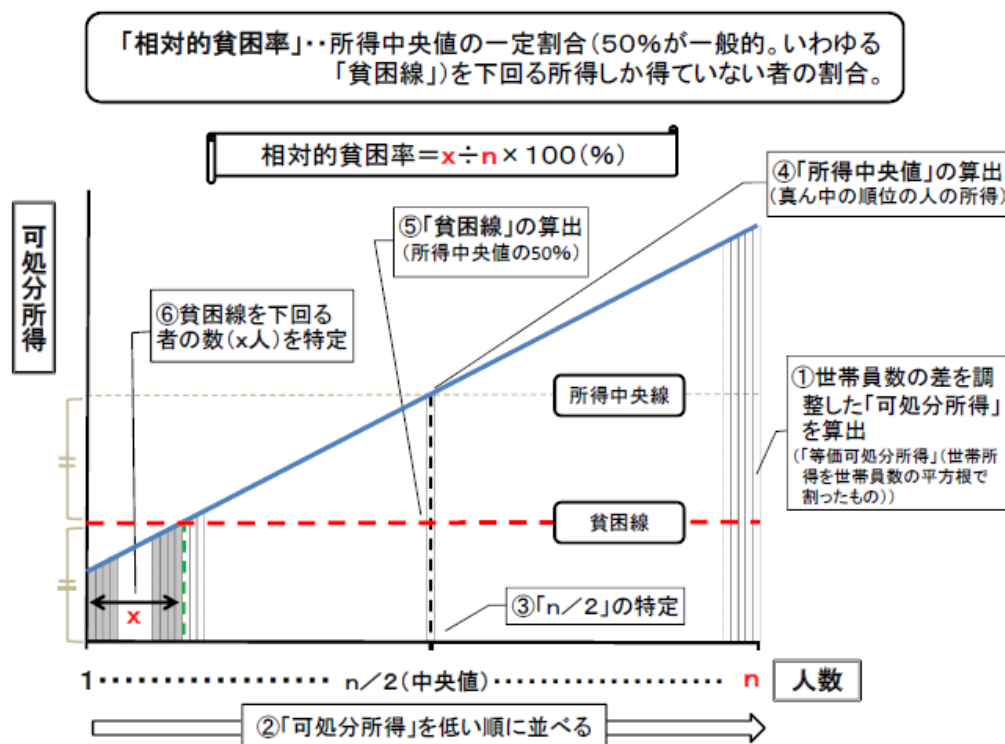
国民生活基礎調査における相対的貧困率は、一定基準（貧困線）を下回る等価可処分所得しか得ていない者の割合のことである。貧困線とは、等価可処分所得（世帯の可処分所得（収入から税金・社会保険料等を除いたいわゆる手取り収入）を世帯人員の平方根で割って調整した所得）の中央値の半分の値をいい、OECD（経済協力開発機構）の作成基準に基づき算出されている。次頁参考資料



(有効回答者: 人)

・県との比較

	宇土市	県
所得中央値	216 万円	212 万円
貧困線	108 万円	106 万円
貧困線未満割合	11.5%	15.0%



※厚生労働省公表資料抜粋

所得中央値：等価可処分所得（世帯の可処分所得（収入から税金・社会保険料等を除いたいわゆる手取り収入）を世帯人員の平方根で割って調整した所得）の中央値

貧困線：所得中央値の半分の値

この貧困線が 108 万円について、世帯所得に換算すると

3人世帯の場合 $108 \text{ 万円} \times \sqrt{3} \approx 187 \text{ 万円}$

4人世帯の場合 $108 \text{ 万円} \times \sqrt{4} = 216 \text{ 万円}$ となる。

また、所得中央値 216 万円について、世帯所得に換算すると

3人世帯の場合 $216 \text{ 万円} \times \sqrt{3} \approx 374 \text{ 万円}$

4人世帯の場合 $216 \text{ 万円} \times \sqrt{4} = 432 \text{ 万円}$ となる。

Ⅱ 調査結果（属性）

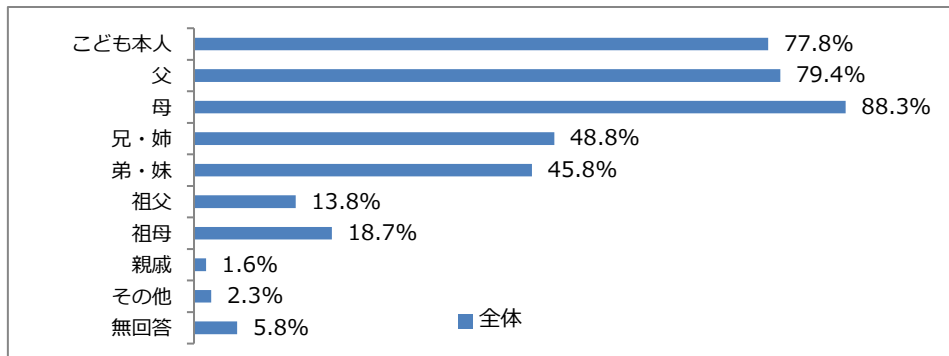
＜世帯員の種別＞

・世帯で同居しているのは、全体では「母」が最も高く、「父」、「兄・姉」、「弟・妹」、「祖母」、「祖父」の順に高くなっている（図 1）。

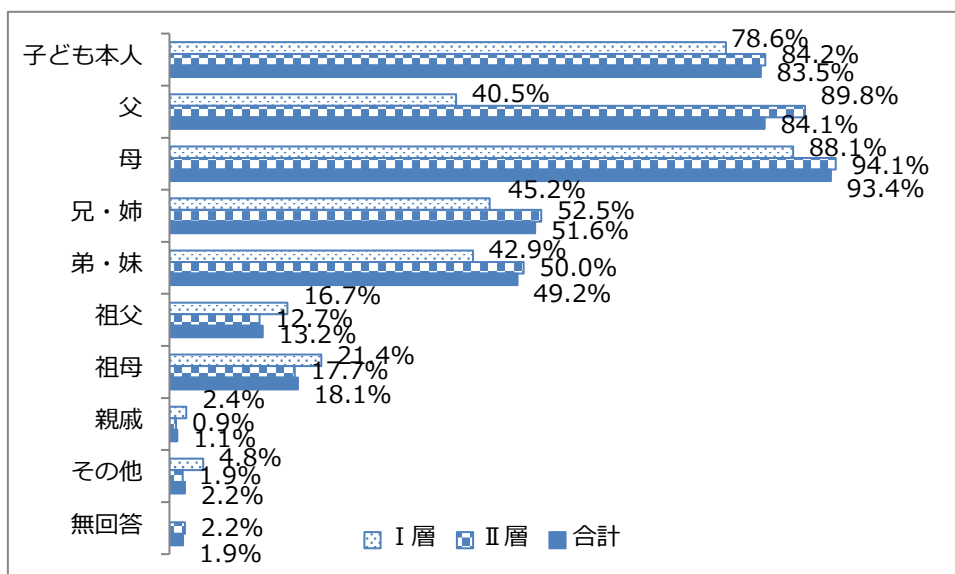
・経済状況別にⅠ層とⅡ層で差が大きい項目に着目すると、Ⅰ層では「父」又は「母」と同居していない、「兄・姉」又は「弟・妹」と同居していない割合が高くなっている（図 2）。

・世帯類型別にふたり親世帯とひとり親世帯で差が大きい項目に着目すると、上記Ⅰ層と同じ傾向が見られた。このうち、ひとり親世帯において、「父」が 13.2%、「母」が 86.8% となっているのは、ひとり親世帯のうち父子世帯と母子世帯の割合を示している（図 3）。

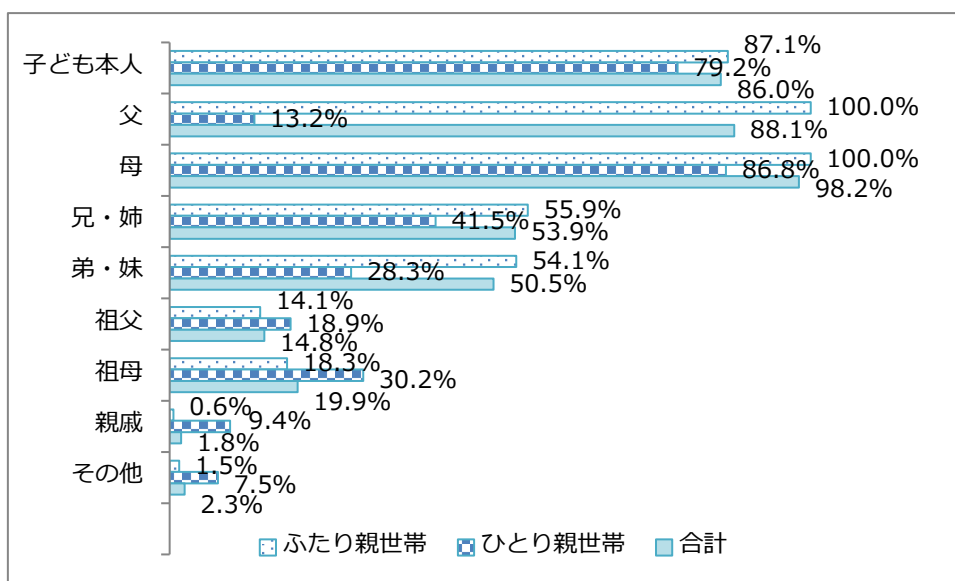
（図 1・保護者調査票／問 2－2）



(図 2・保護者調査票/問 2-2, 経済状況別)



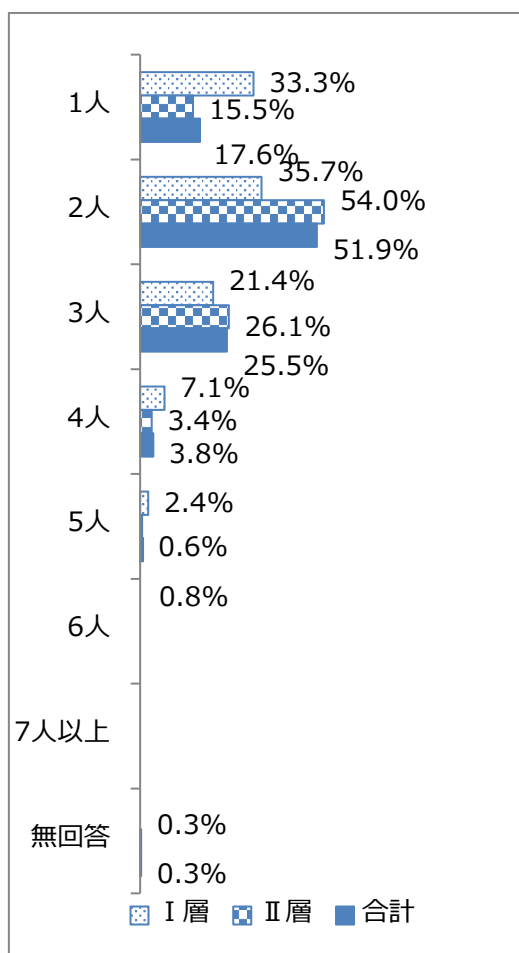
(図 3・同上, 世帯類型別)



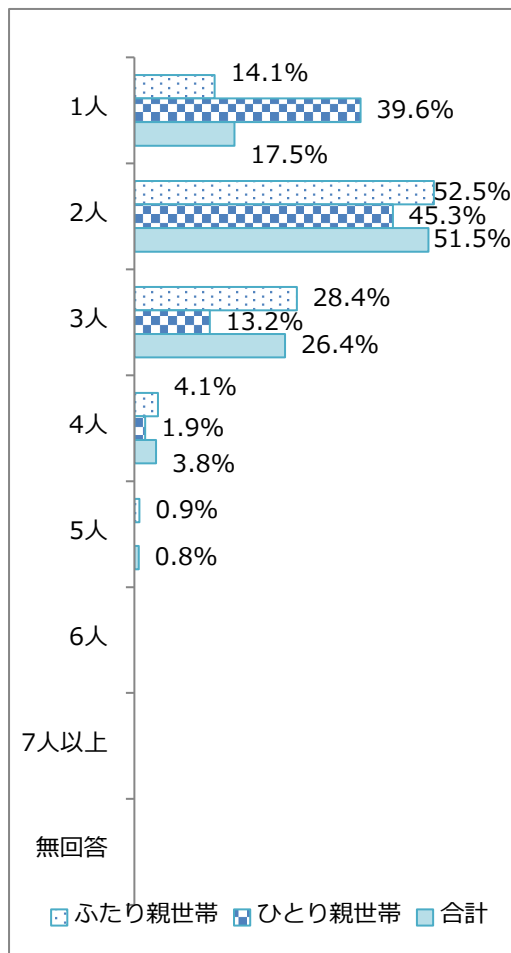
＜世帯員のうち 18 歳未満の子どもの数＞

- ・経済状況別にⅠ層とⅡ層の間で差が大きい項目に着目すると、Ⅰ層では「1 人」及び「4 人」の割合が高く、Ⅱ層では「2 人」及び「3 人」の割合が高くなっている（図 4）。
- ・世帯類型別にふたり親世帯とひとり親世帯の間で差が大きい項目に着目すると、ふたり親世帯では「2 人」及び「3 人」の割合が高く、ひとり親世帯では「1 人」の割合が高くなっている（図 5）。

（図 4・保護者調査票／問 2-3，経済状況別）



（図 5・同上，世帯類型別）



Ⅲ 調査結果分析，課題と方向性

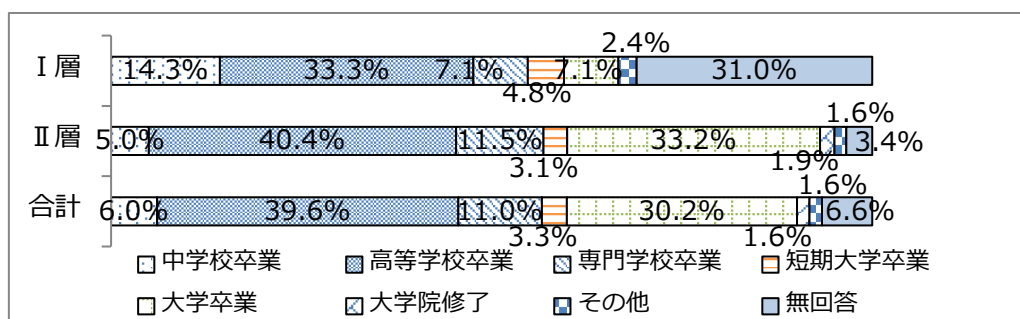
1. 経済状況

父母の最終学歴，就業状況，世帯の所得合計

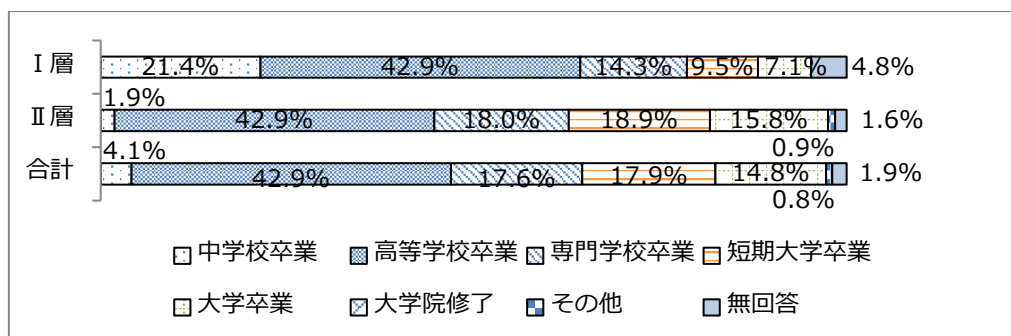
① 父母の最終学歴

・経済状況別にⅠ層とⅡ層の差が大きい項目に着目すると，父について，Ⅰ層では「中学校卒業」の割合が高く，Ⅱ層では「高等学校卒業」，「専門学校卒業」，「大学卒業」の割合が高くなっている（図 6-1）。また，母について，Ⅰ層では「中学校卒業」の割合が高く，Ⅱ層では「専門学校卒業」，「短期大学卒業」，「大学卒業」の割合が高くなっている（図 6-2）。

（図 6-1・保護者調査票／問 12，父，経済状況別）



（図 6-2・保護者調査票／問 12，母，経済状況別）

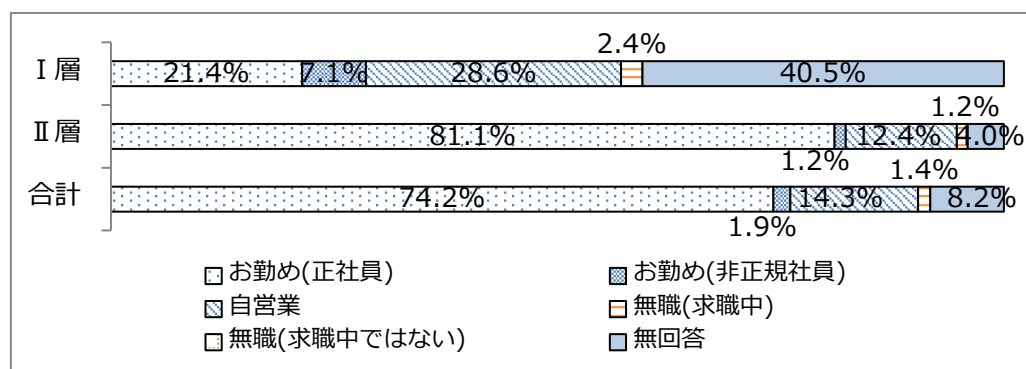


② 父母の就業状況

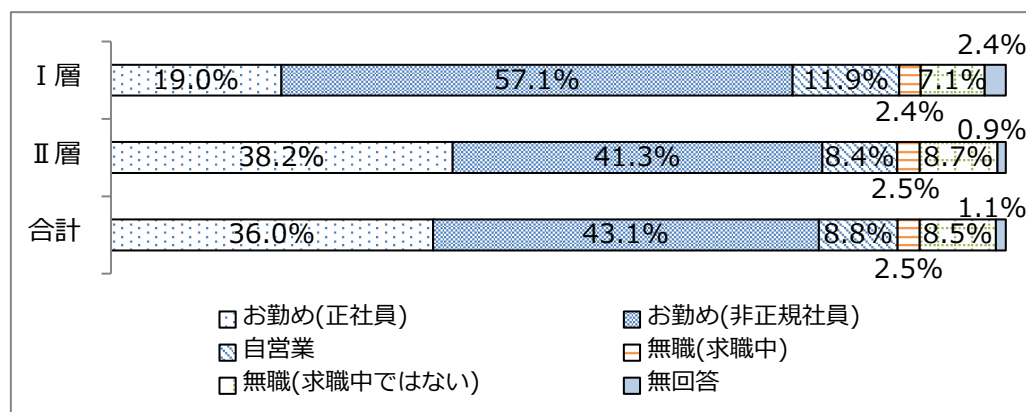
・経済状況別にⅠ層とⅡ層の間で差が大きい項目に着目すると、父について、Ⅰ層では「お勤め（非正規社員）」の割合が高く、Ⅱ層では「お勤め（正社員）」の割合が高くなっている（図 7-1）。

・また、母について、Ⅰ層では「お勤め（非正規社員）」の割合が高く、Ⅱ層では「お勤め（正社員）」の割合が高くなっているが、Ⅱ層でも「お勤め（非正規社員）」の割合が高くなっている（図 7-2）。

（図 7-1・保護者調査票/問 14-1（父），経済状況別）



（図 7-2・同上/問 14-2（母），経済状況別）

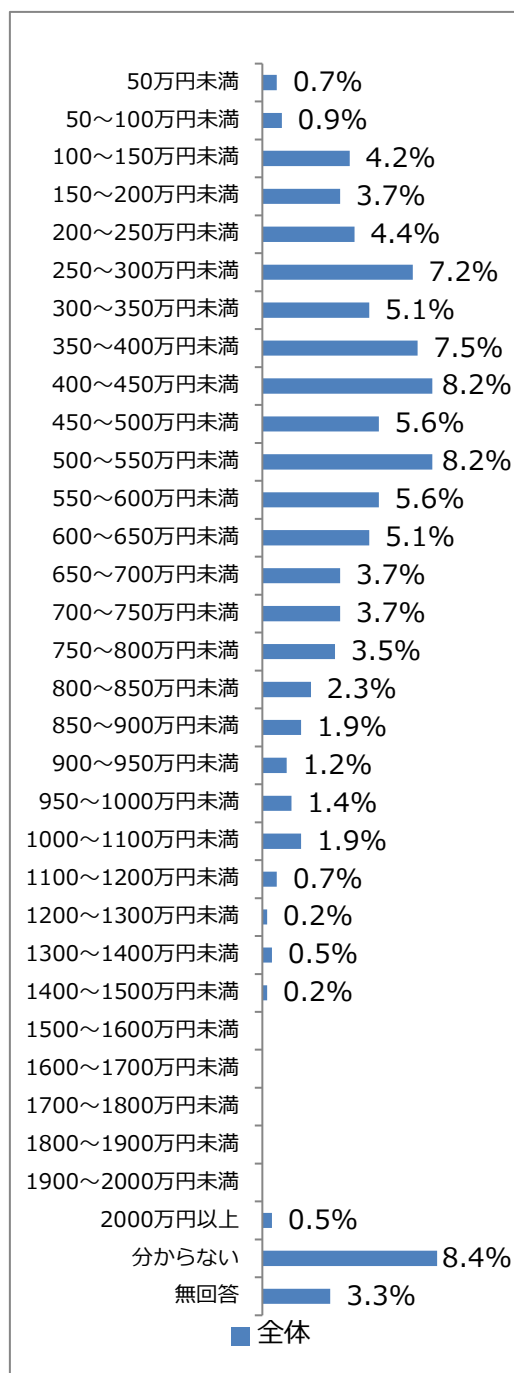


③ 世帯の所得合計

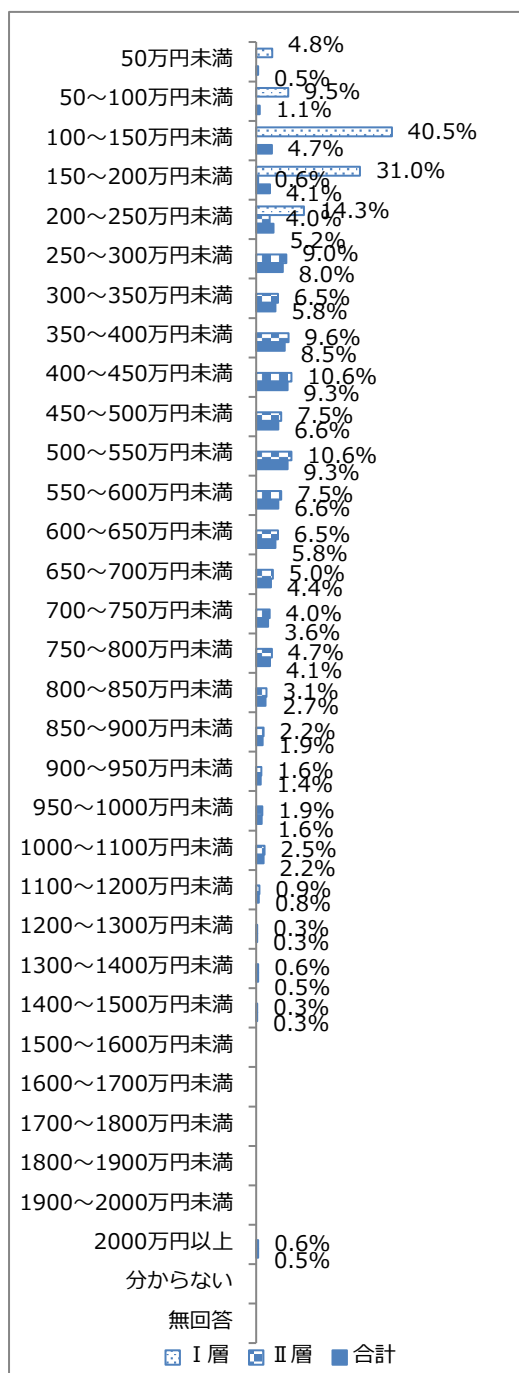
・回答者全体の 5 割弱程度が 250～650 万円未満であった（図 8）。最も割合が高くなっているのは、「400～450 万円未満」と「500～550 万円未満」である。

・経済状況別に I 層と II 層の間で差が大きい項目に着目すると、I 層では「50 万円未満」～「200～250 万円未満」の割合が高く、「250～300 万円未満」以上の区分では該当者が存在しない。

（図 8-1・保護者調査票／問 15）



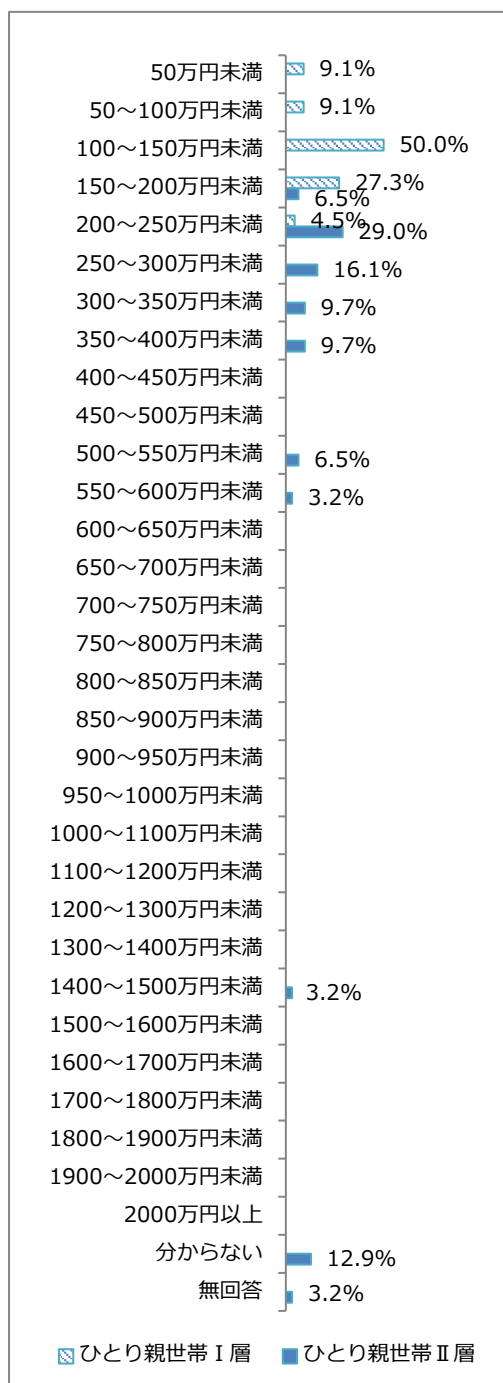
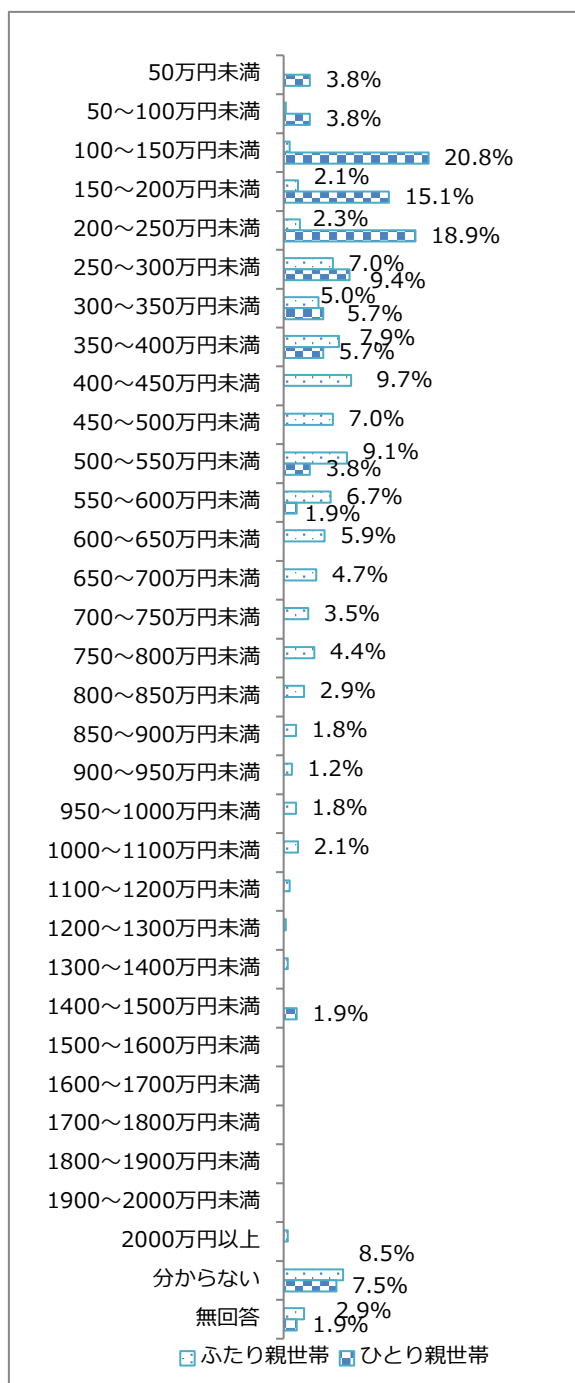
（図 8-2・同、経済状況別）



・また、世帯類型別にふたり親世帯とひとり親世帯との間で差が大きい項目に着目すると、ひとり親世帯では「50万円未満」～「300～350万円未満」の割合が高くなっている（図8-3）。ひとり親世帯かつⅡ層の世帯に着目すると、150～400万円未満に所得合計の分布が見られ、Ⅱ層の中で低～中程度の所得に位置しているといえる（図8-4）。

（図8-3・保護者調査票/問15、世帯類型別）

（図8-4・同、ひとり親世帯経済状況別）



分析

・父母の学歴，就業状況をみると，Ⅰ層で「中学校卒業」の割合が高くなっており，かつⅠ層で「お勤め（非正規社員）」の割合が高くなっていることから，学歴と就業状況の相関関係がうかがえる。各世帯の構成が異なるため一概には言えないが，世帯の所得合計においてⅠ層では 250 万円以上の区分で該当者が存在しないという結果からも，学歴や就業状況が世帯の経済状況に影響していると考えられる。

特にひとり親世帯について，回答者全体では世帯の所得合計は「400～450 万円未満」及び「500～550 万円未満」の割合がもっとも高くなっていることと比較すると，ひとり親世帯では主に 50 万円未満～400 万円未満に世帯の所得合計の分布が見られ，所得が低い傾向にあると考えられる。

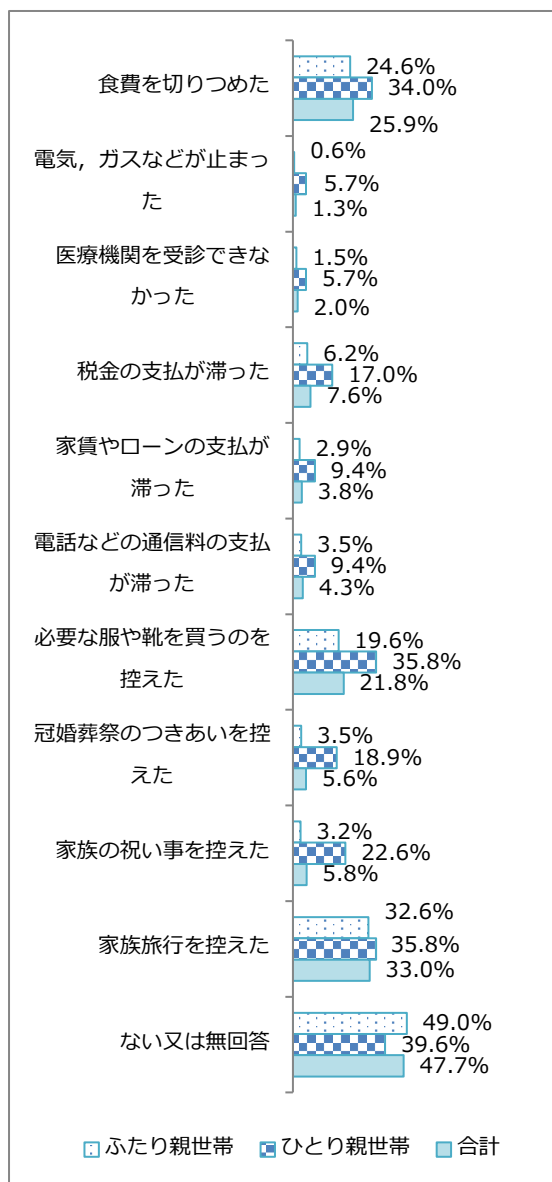
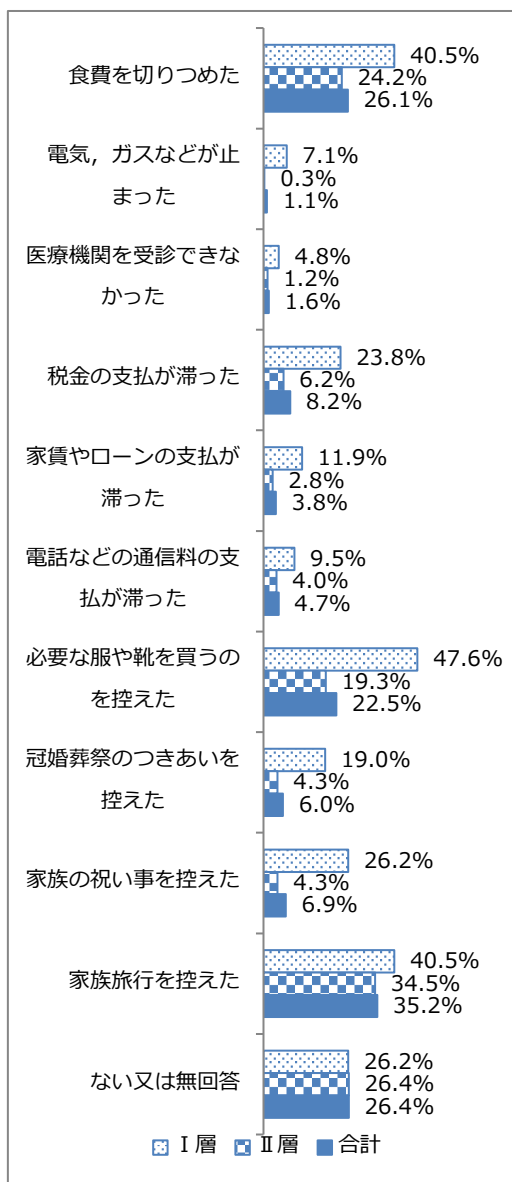
＜世帯における経済的理由による経験＞

・経済状況別にⅠ層とⅡ層の間に差が大きい項目に着目すると、Ⅰ層において「ない又は無回答」を除く全ての項目でⅡ層よりも割合が高くなっているが、特に、Ⅰ層で「税金の支払いが滞った」が23.8%、「電気、ガスなどが止まった」が7.1%など、経済的な困難が、生活基盤の不安定化を引き起こしている。また、衣食住に関する項目もⅠ層の中で高い割合を示しており、生活基盤への貧困の影響があるとみられる（図9-1）。

・世帯類型別にふたり親世帯とひとり親との間で差が大きい項目に着目すると、ひとり親世帯で「ない又は無回答を除く全ての項目でふたり親世帯よりも割合が高くなっている（図9-2）。

（図9-1・保護者調査票/問17、経済状況別）

（図9-2・同、世帯類型別）



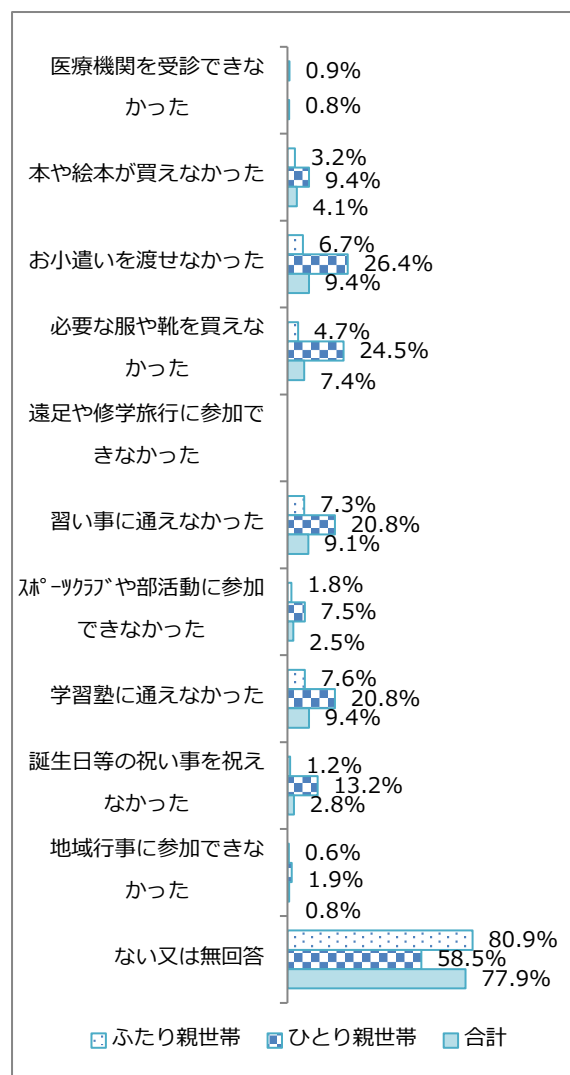
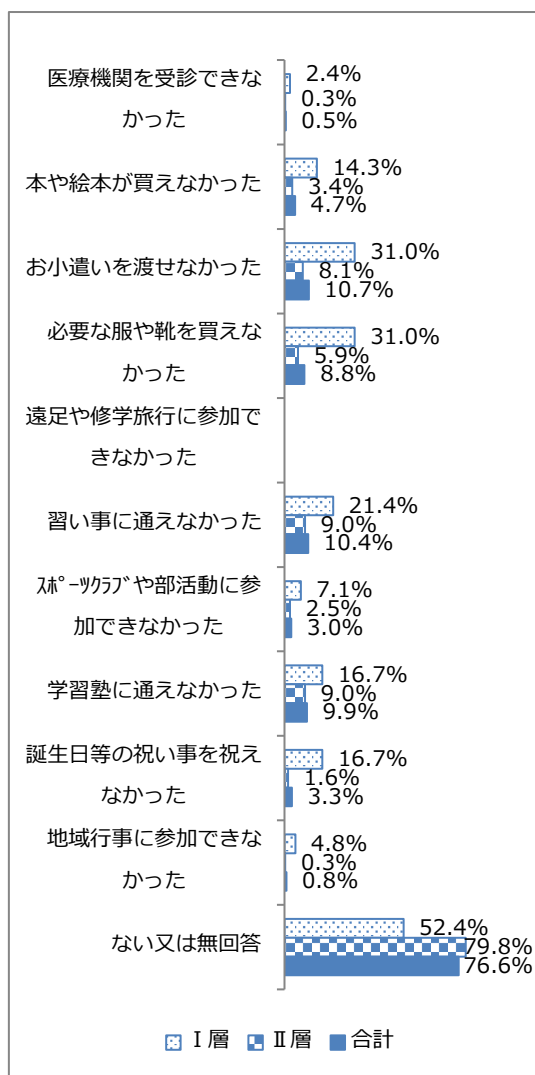
＜経済的理由による子どもの経験＞

・経済状況別にⅠ層とⅡ層の間に差が大きい項目に着目すると、Ⅰ層において「ない又は無回答」を除く全ての項目でⅡ層よりも割合が高くなっているが、特に、Ⅰ層で「本や絵本が買えなかった」が14.3%、「誕生日等の祝い事を祝えなかった」が16.7%、「学習塾に通えなかった」が16.7%、「習い事に通えなかった」が21.4%、「必要な服や靴を買えなかった」が31.0%存在するなど、経済的な困難が、生活の基盤である衣食住や、子どもの学習・文化的環境などの局面で大きな影響を与えていることが分かる（図10-1）。

・世帯類型別にふたり親世帯とひとり親世帯との間に差が大きい項目に着目すると、ひとり親世帯で「ない又は無回答」を除く全ての項目でふたり親世帯よりも割合が高くなっている（図10-2）。

（図10-1・保護者調査票/問18，経済状況別）

（図10-2・同，世帯類型別）

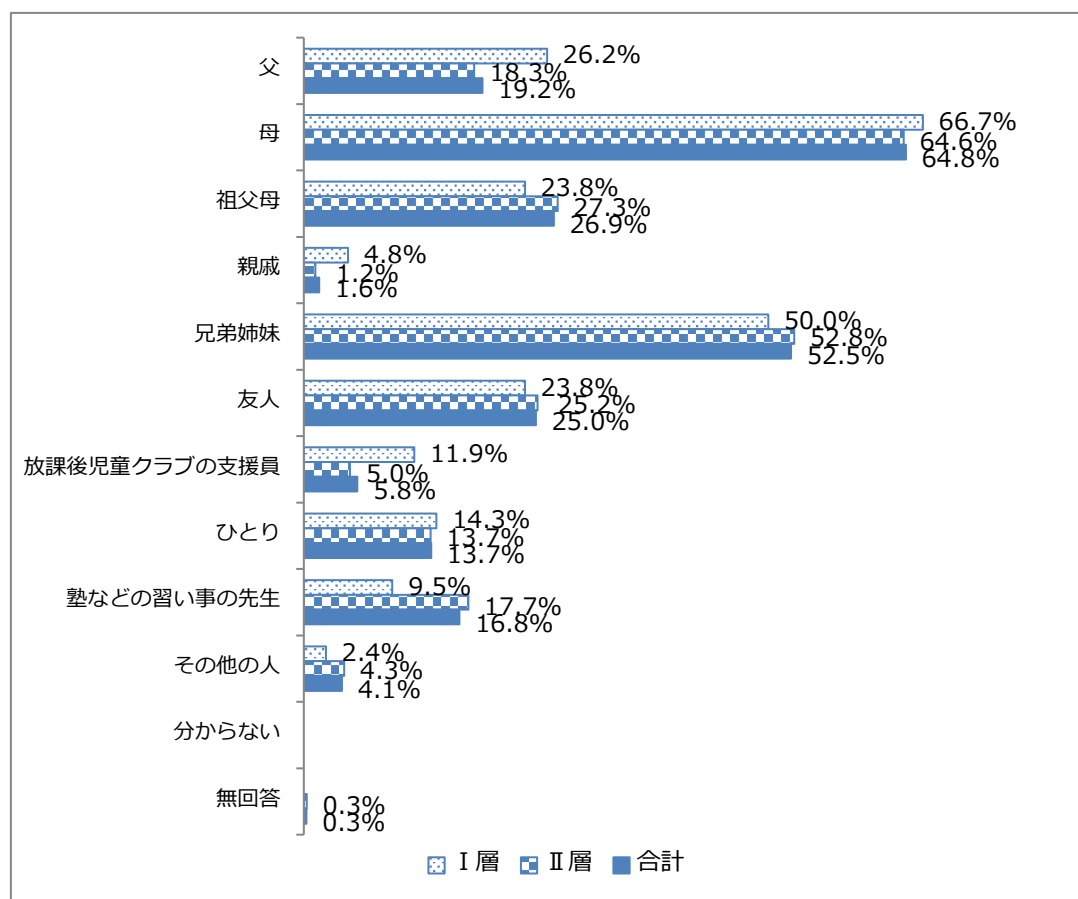


2. 生活環境

<子どもが放課後に過ごす相手>

・子どもが、学校が終わってから夕食までの間、主に誰と過ごしているかについて、経済状況別にⅠ層とⅡ層の差が大きい項目に着目すると、Ⅰ層で「塾などの習い事の先生」の割合が低く、「放課後児童クラブの支援員」の割合が高くなっている（図 11）。

（図 11・保護者調査票／問 7，経済状況別）

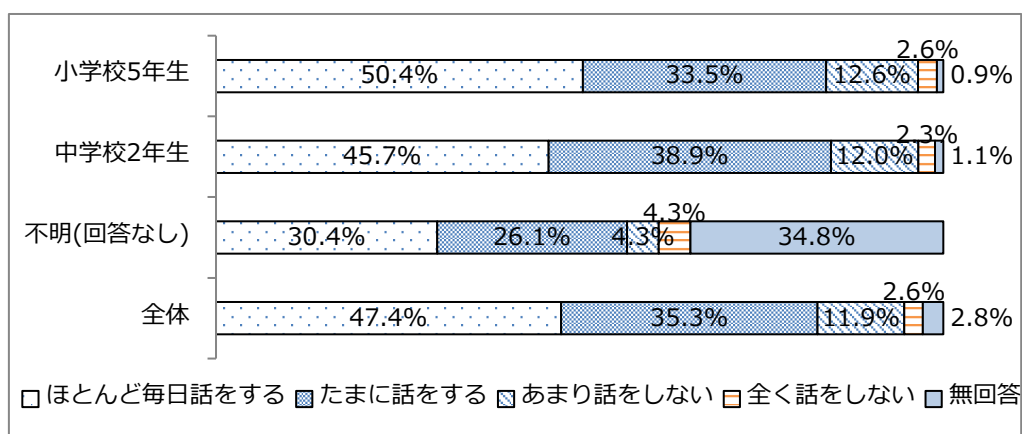


<子どもと保護者の会話の頻度>

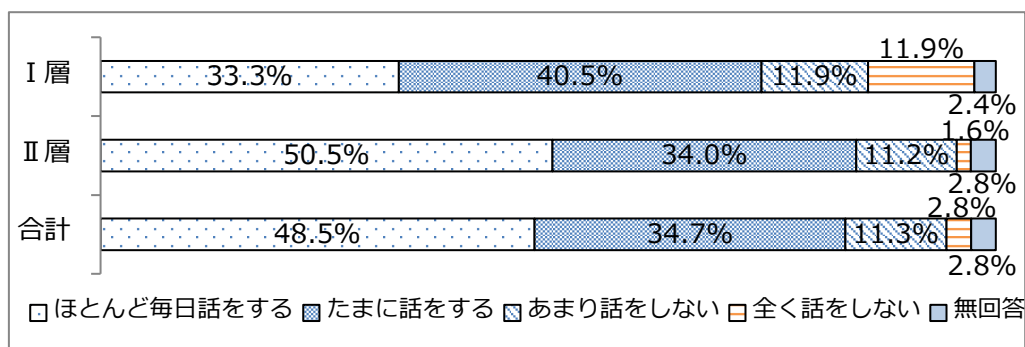
・子どもが保護者と学校の出来事について話をする頻度は、回答者全体では、「ほとんど毎日話をする」が 47.4%で最も高く、「たまに話をする」が 35.3%、「あまり話をしない」が 11.9%、「全く話をしない」が 2.6%の順に高くなっている（図 12-1）。小学校 5 年生の子どもと中学校 2 年生の子どもとで回答傾向に差は見られず、「ほとんど毎日話をする」と「たまに話をする」を合わせた割合が 8 割強程度であった。

また、経済状況別にⅠ層とⅡ層の差が大きい項目に着目すると、Ⅰ層で「ほとんど毎日話をする」の割合が低く、「全く話をしない」の割合が高くなっている（図 12-2）。

（図 12-1・子ども調査票／問 13）



（図 12-2・同上，経済状況別）

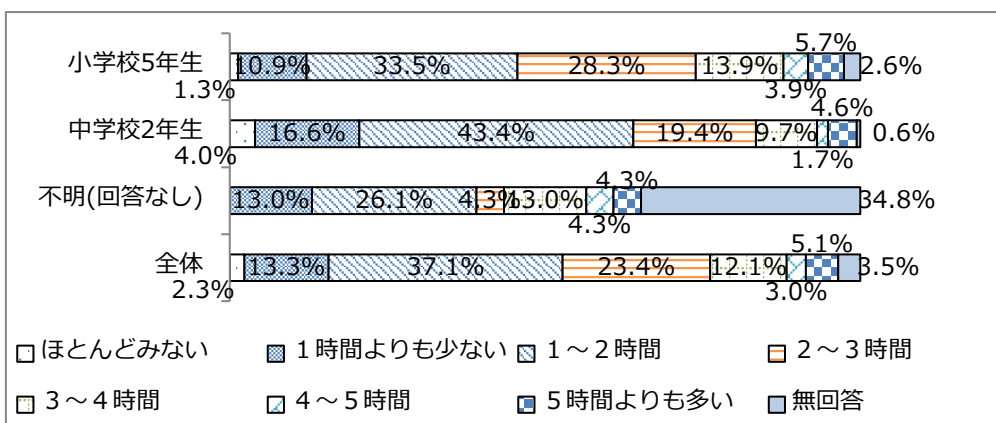


子どものテレビ等にかかる時間と勉強時間、睡眠時間

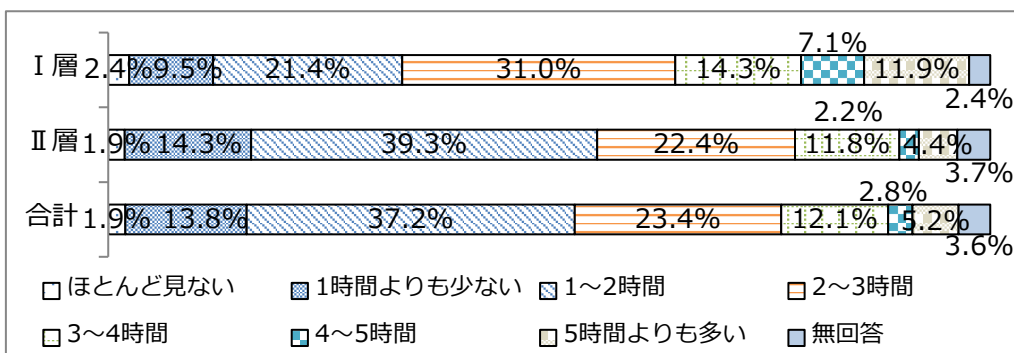
① 平日にテレビを見る時間

- ・回答者全体では、「1～2 時間」が 37.1%で最も高く、「2～3 時間」が 23.4%、「1 時間よりも少ない」が 13.3%、「3～4 時間」が 12.1%の順に高くなっている（図 13-1）。テレビの視聴時間は、小学校 5 年生で長く、中学校 2 年生で短い傾向があり、小学校 5 年生と中学校 2 年生の子どもとで回答傾向に差異が見られた。
- ・経済状況別にⅠ層とⅡ層の間で差が大きい項目に着目すると、Ⅰ層で「ほとんど見ない」～「1～2 時間」を合わせた割合が低く、「2～3 時間」～「5 時間よりも多い」を合わせた割合が高くなっており、視聴時間が長くなるにつれて、Ⅰ層の割合が高くなっている（図 13-2）。
- ・全世帯において自己実現の意識別²で差が大きい項目に着目すると、「そう思う以外」層で 2 時間以上の割合が高くなっている（図 13-3）。

（図 13-1・子ども調査票/問 14）

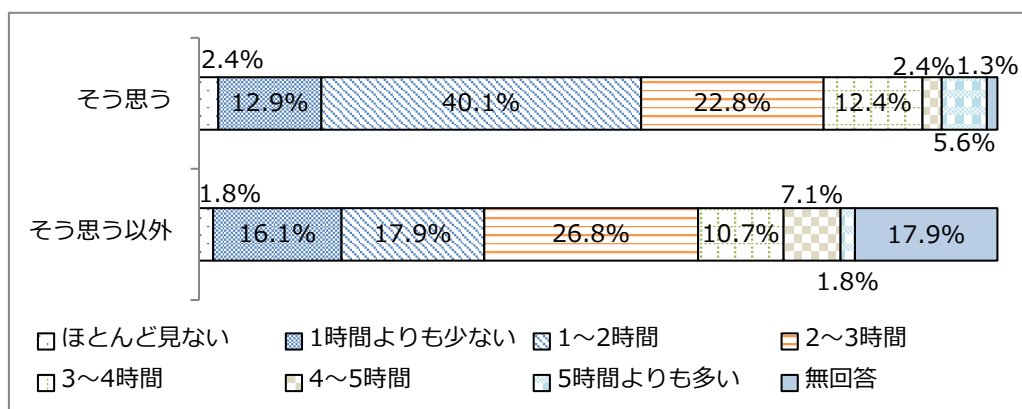


（図 13-2・同，経済状況別）



² 調査票（子ども）問 27「将来のためにも、今、勉強やスポーツ等を頑張りたいと思うか」について、「そう思う」と「どちらかと言えばそう思う」の回答者を『そう思う』に分類し、それ以外の回答者を『そう思う以外』に分類（以下、同じ）。

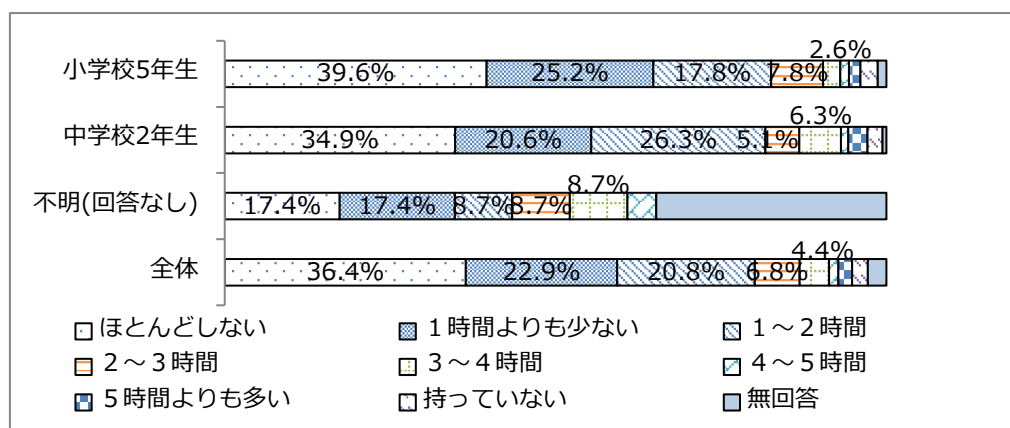
(図 13-3・同, 自己実現の意識別)



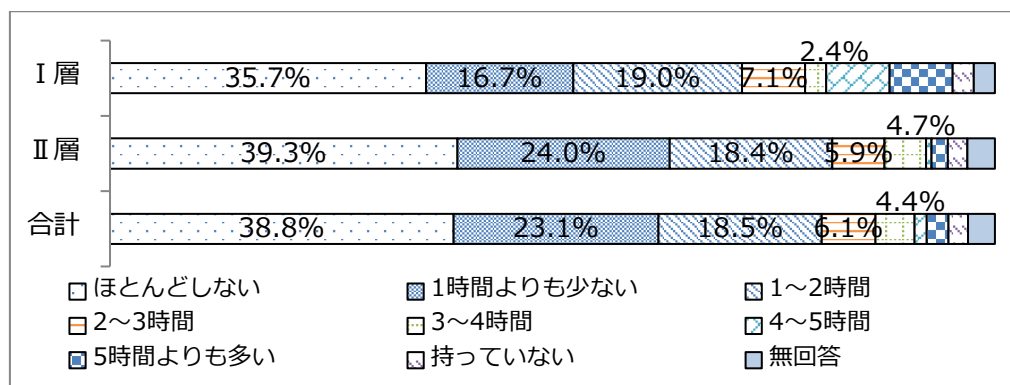
② 平日にゲームをする時間

- ・平日（月～金曜日）にゲームをする時間について、回答者の6割弱程度が「1時間未満」、3割弱程度が「1～3時間」、1割弱程度が「3時間以上」であった（図14-1）。小学校5年生の子どもと中学校2年生の子どもでは、ゲームをする時間は、小学校5年生で短く、中学校2年生で長い傾向があり、小学校5年生と中学校2年生の子どもとで回答傾向に差異が見られた。
- ・経済状況別にⅠ層とⅡ層の間で差が大きい項目に着目すると、Ⅰ層で「ほとんどしない」～「1～2時間」を合わせた割合が低く、「2～3時間」～「5時間よりも多い」を合わせた割合が高く、ゲームをする時間が長くなるにつれて、Ⅰ層の割合が高くなっている（図14-2）。
- ・また、全世帯において、自己実現の意識別で差が大きい項目に着目すると、「そう思う以外」層で、「ほとんどしない」と「1時間よりも少ない」を合わせた割合が低く、「1～2時間」の割合が高くなっている（図14-3）。

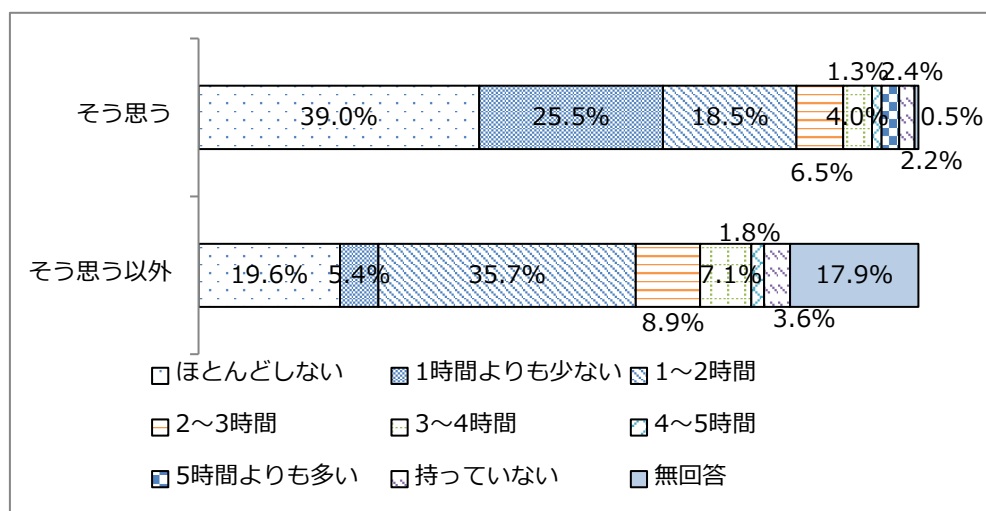
（図14-1・子ども調査票／問15）



（図14-2・同，経済状況別）



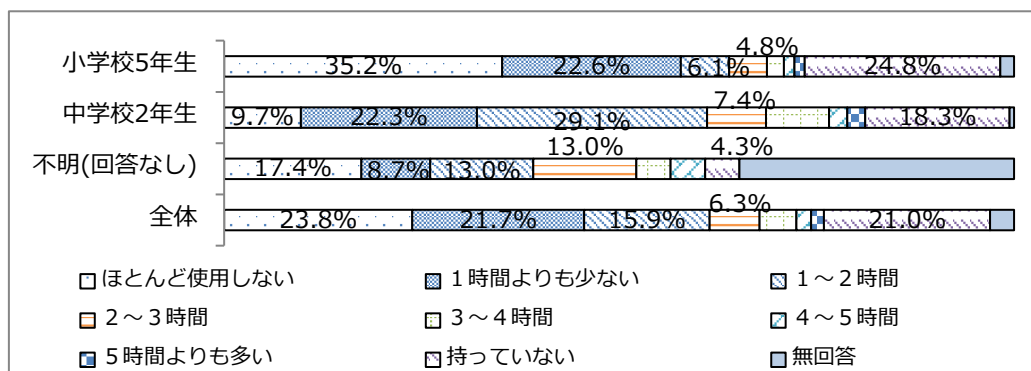
(図 14-3・同, 自己実現の意識別)



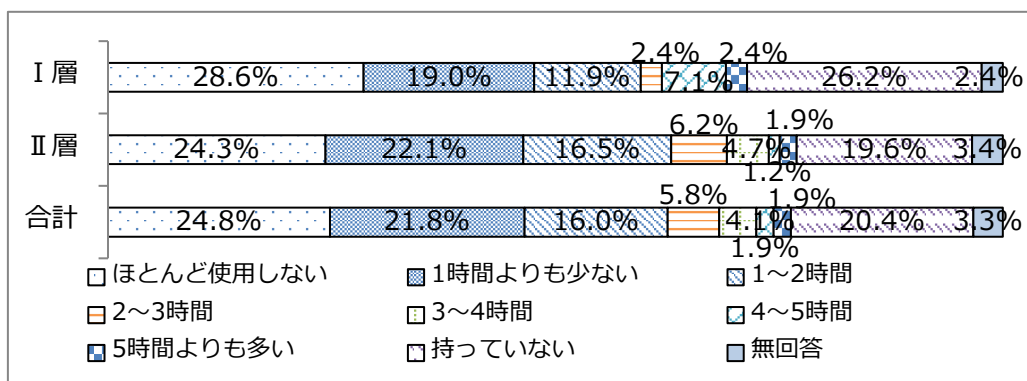
③ 子どもの平日の携帯電話（スマートフォン）の使用時間

- ・回答者全体では、「ほとんど使用しない」が 23.8%で最も高く、「1 時間よりも少ない」が 21.7%,「持っていない」が 21.0%,「1～2 時間」が 15.9%の順に高くなっている(図 15-1)。
携帯電話等の使用時間は、小学校 5 年生で短く、中学校 2 年生で長い傾向があり、小学校 5 年生と中学校 2 年生の子どもとで回答傾向に差異が見られた。
- ・経済状況別にⅠ層とⅡ層で差が大きい項目に着目すると、Ⅱ層で「1～2 時間」から「5 時間よりも多い」を合わせた割合が高くなっている (図 15-2)。
- ・全世帯において自己実現の意識別で差が大きい項目に着目すると、「そう思う」層で「ほとんど使用しない」～「1～2 時間」を合わせた割合が高くなっている。また、「そう思う以外」層で「無回答」の割合が高くなっている (図 15-3)。

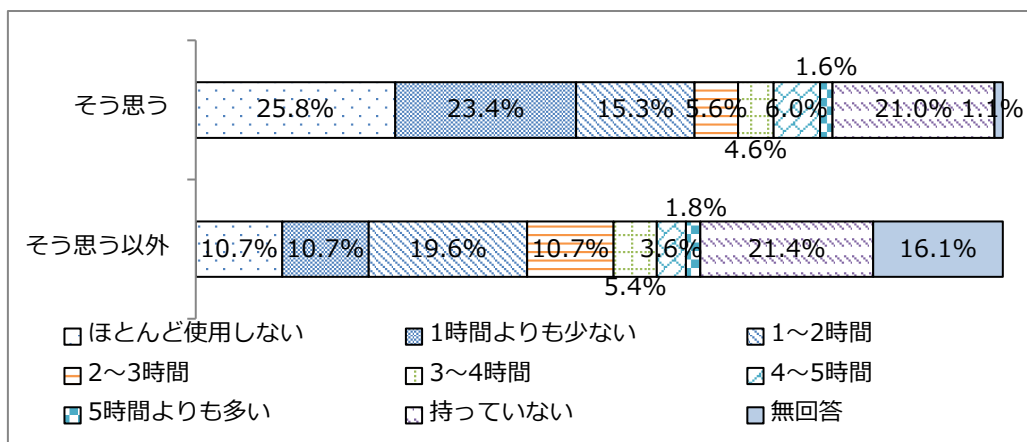
(図 15-1・子ども調査票/問 16)



(図 15-2・同, 経済状況別)



(図 15-3・同, 自己実現の意識別)



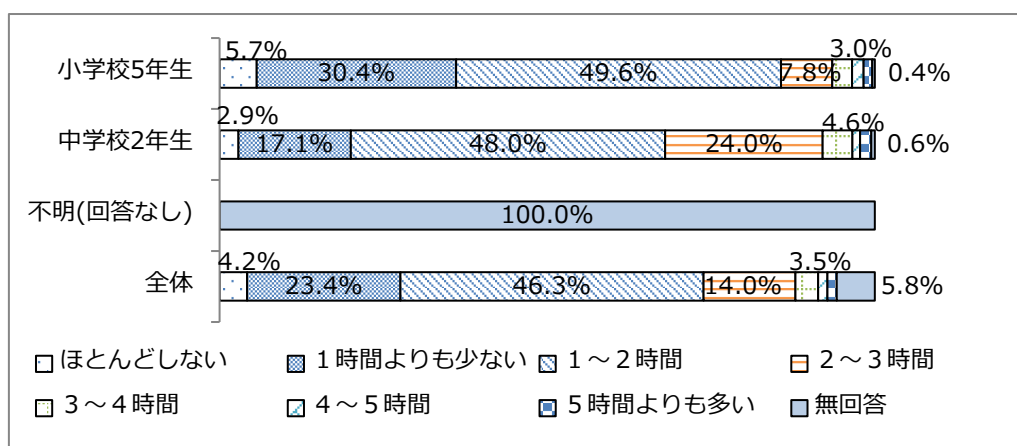
④ 平日の授業以外の勉強時間（塾での勉強時間を含める）

- ・回答者全体では、「1～2時間」が46.3%で最も高く、「1時間よりも少ない」が23.4%、「2～3時間」が14.0%、「ほとんどしない」が4.2%の順に高くなっている（図16-1）。

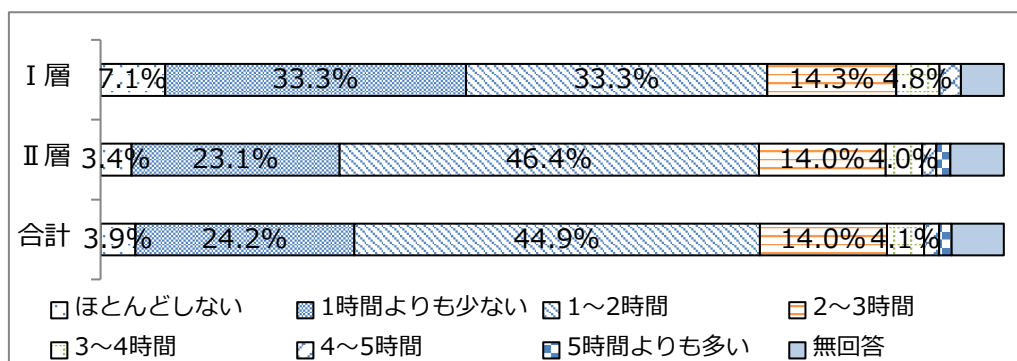
平日における学校の授業以外での勉強時間は、小学校5年生で短く、中学校2年生で長くなっており、小学校5年生で「2時間以上」が1割程度であるのに対し、中学校2年で3割程度であるなど、小学校5年生と中学校2年生の子どもとで回答傾向に差異が見られた。

- ・経済状況別にⅠ層とⅡ層の間で差が大きい項目に着目すると、Ⅰ層で「ほとんどしない」「1時間よりも少ない」を合わせた割合が高くなっている（図16-2）。
- ・全世帯において自己実現の意識別で差が大きい項目に着目すると、「そう思う以外」層で上記Ⅰ層と同じ傾向が見られた（図16-3）。

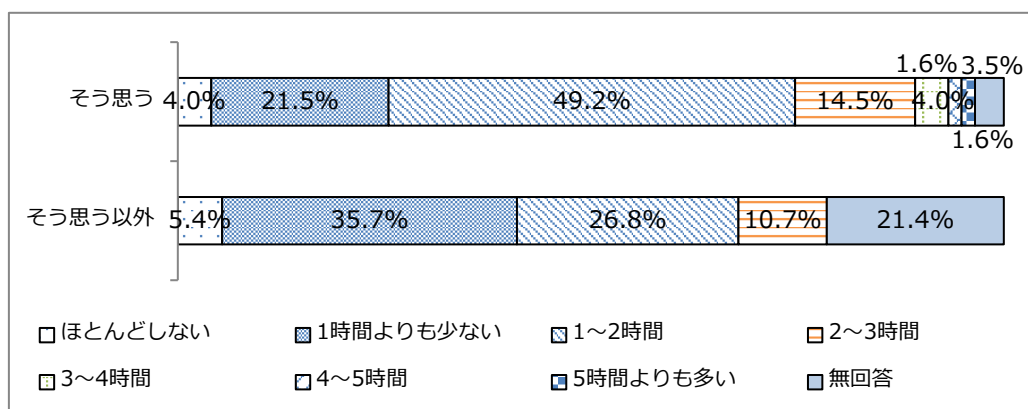
（図16-1・子ども調査票/問4）



（図16-2・同，経済状況別）



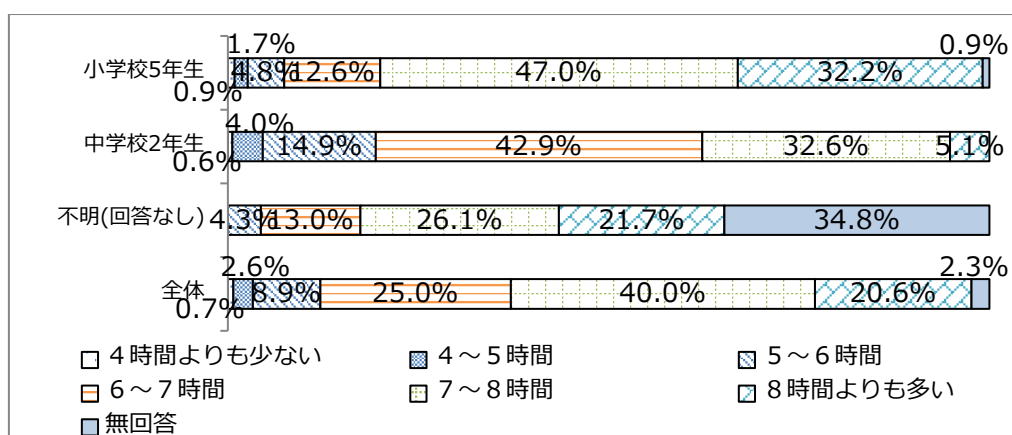
(図 16-3・同, 自己実現の意識別)



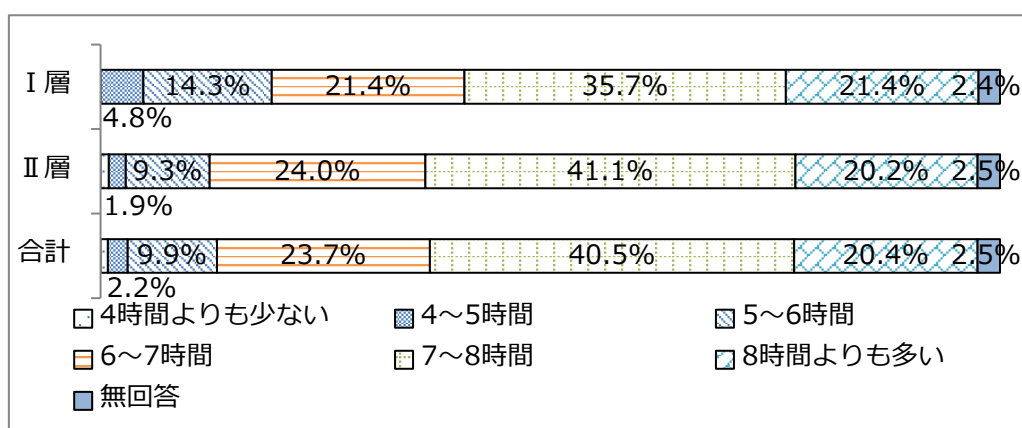
⑤ 平日の平均睡眠時間

- ・回答者全体では、「7～8 時間」が 40.0%で最も高く、「6～7 時間」が 25.0%、「8 時間よりも多い」が 20.6%、「5～6 時間」が 8.9%、「4～5 時間」が 2.6%、「4 時間よりも少ない」が 0.7%の順に高くなっている。
- ・小学校 5 年生で「7 時間以上寝ている」が 8 割程度となっているのに対し、中学校 2 年生で「7 時間未満」が 6 割程度となっており、小学校 5 年生と中学校 2 年生の子どもとで回答傾向に差異が見られた。
- ・経済状況別にⅠ層とⅡ層の間で差が大きい項目に着目すると、Ⅰ層で「4～5 時間」、「5～6 時間」を合わせた割合が高く、「7～8 時間」、「8 時間よりも多い」を合わせた割合が低くなっている。
- ・全世帯において自己実現の意識別で差が大きい項目に着目すると、「そう思う」層で「7～8 時間」、「8 時間よりも多い」を合わせた割合が高くなっている。また、「そう思う以外」層で「無回答」の割合が高くなっている。

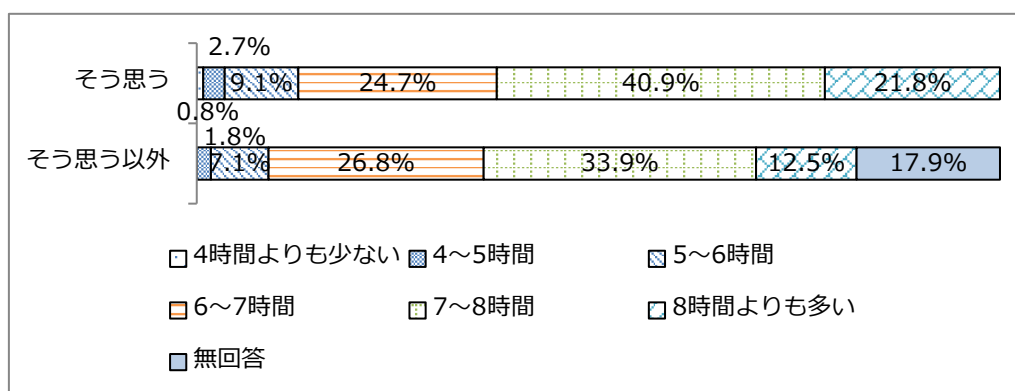
(図 17-1・子ども調査票/問 28)



(図 17-2・同，経済状況別)



(図 17-3・同, 自己実現の意識別)



分析

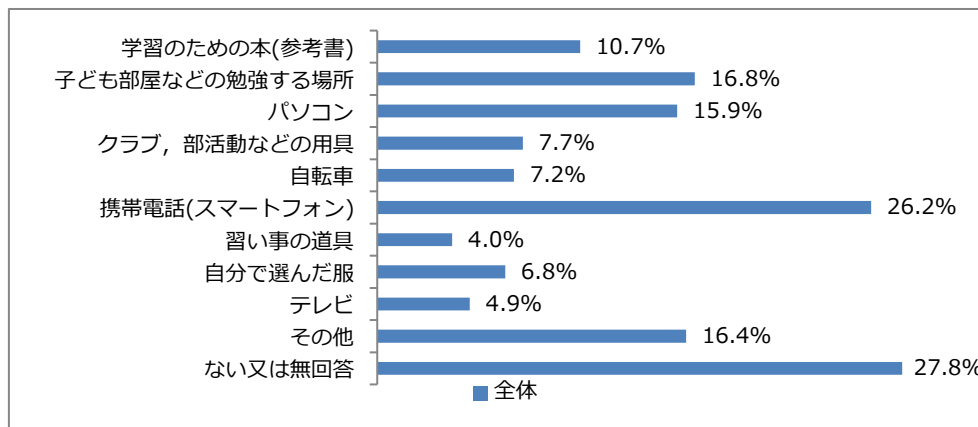
- ・平日にテレビを見る時間は、小学校 5 年生で長く、中学校 2 年生で短い傾向が見られた。他方、平日にゲームをする時間や平日の携帯電話（スマートフォン）の使用時間は、小学校 5 年生で短く、中学校 2 年生で長いという回答傾向が見られた。
- ・経済状況別では、テレビの視聴時間やゲームをする時間は、時間が長くなるにつれてⅠ層の割合が高くなっているが、携帯電話（スマートフォン）の使用時間はⅡ層で長時間の割合が高くなっていた。
- ・自己実現の意識別では、平日にテレビを見る時間や平日にゲームをする時間、平日に携帯電話（スマートフォン）を使用する時間が「そう思う以外」層で長時間の割合が高くなっていた。
- ・これらの、平日のテレビやゲーム、携帯電話（スマートフォン）にかける時間の長さは、平日の授業以外の勉強時間の長さに影響すると考えられる。
- ・平日の授業以外の勉強時間は、小学校 5 年生で短く、中学校 2 年生で長くなっていた。テレビを見る時間は小学校 5 年生が中学校 2 年生よりも長いですが、ゲームと携帯電話（スマートフォン）では中学校 2 年生の使用時間が長く、小学校 5 年生と中学校 2 年生の比較では、勉強時間が上述の要素にあまり左右されていないと考えられる。
- ・経済状況別では、Ⅰ層で平日の勉強時間が短い傾向が見られた。テレビやゲームにかける時間はⅠ層がⅡ層よりも長く、勉強時間とテレビ等にかける時間との関連性がうかがえる。しかし、携帯電話（スマートフォン）の使用時間については、Ⅱ層がⅠ層よりも長い傾向がみられ、これはⅠ層で携帯電話（スマートフォン）を「持っていない」と回答した割合が高いことが理由ではないかと考えられる。
- ・また自己実現の意識別では、「そう思う以外」層で、平日の勉強時間が短い傾向が見られた。平日のテレビ等にかける時間は、「そう思う以外」層が「そう思う」層よりも長く、ここでも勉強時間とテレビ等にかける時間との関連性がうかがえる。
- ・更に、ここまで述べた勉強やテレビ等にかける時間の長さが、平日の平均睡眠時間の長さに影響すると考えられる。
- ・小学校 5 年生と中学校 2 年生では中学校 2 年生の睡眠時間が短く、Ⅰ層とⅡ層ではⅡ層が短い傾向がみられた。また、自己実現の意識別では、「そう思う以外」層で、7 時間以上の割合が低くなっていた。
- ・以上を踏まえると、小学校 5 年生よりも中学校 2 年生で授業以外により長い勉強時間がかかるが、Ⅰ層では勉強時間よりもテレビ等にかける時間が長くなる傾向が見られ、その分睡眠時間も短くなっていると考えられる。このため、特に中学校 2 年生のⅠ層で生活リズムの乱れが懸念される。また、自己実現の意識別を見ると、自己実現の意識が低い子どもほどテレビ等にかける時間が長く勉強時間は短く、睡眠時間も短い傾向があらわれており、子どもの将来への意欲とこれらの行動に一定の関連性があると考えられる。

＜子どもが自分にとって必要と思っても持っていないもの＞

・子ども自身が、自分にとって必要と思っても持っていないものについて、回答者全体では、「携帯電話（スマートフォン）」が 26.2%で最も高く、「子ども部屋などの勉強する場所」が 16.8%、「その他」が 16.4%、「パソコン」が 15.9%、「学習のための本（参考書）」が 10.7%の順に高くなっている（図 18）。「携帯電話（スマートフォン）」の割合が高くなっている一方で、「パソコン」の割合は、上位 5 項目には入っているものの、携帯電話と比べると低くなっている。

なお、小学校 5 年生の子どもと中学校 2 年生の子どもで回答傾向に差異は見られなかった（表 1）。

（図 18・子ども調査票／問 17）



（表 1・子ども調査票／問 17）

	小学校5年生		中学校2年生		不明(回答なし)		全体	
	件数	割合	件数	割合	件数	割合	件数	割合
学習のための本(参考書)	24	10.4%	19	10.9%	3	13.0%	46	10.7%
子ども部屋などの勉強する場所	42	18.3%	29	16.6%	1	4.3%	72	16.8%
パソコン	40	17.4%	25	14.3%	3	13.0%	68	15.9%
クラブ、部活動などの用具	16	7.0%	17	9.7%	0	0.0%	33	7.7%
自転車	19	8.3%	12	6.9%	0	0.0%	31	7.2%
携帯電話(スマートフォン)	59	25.7%	47	26.9%	6	26.1%	112	26.2%
習い事の道具	9	3.9%	7	4.0%	1	4.3%	17	4.0%
自分で選んだ服	15	6.5%	14	8.0%	0	0.0%	29	6.8%
テレビ	13	5.7%	8	4.6%	0	0.0%	21	4.9%
その他	39	17.0%	26	14.9%	5	21.7%	70	16.4%
ない又は無回答	65	28.3%	45	25.7%	9	39.1%	119	27.8%
計	230		175		23		428	

歯磨きの回数とむし歯

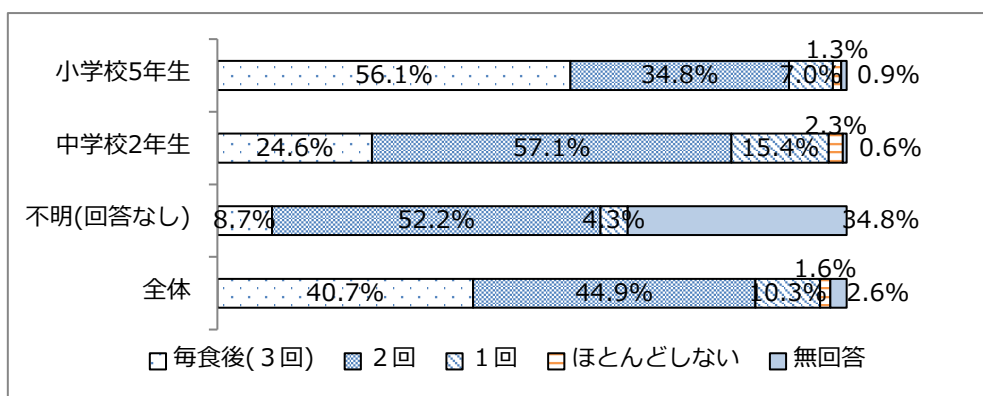
① 歯磨きの回数

- ・子どもの歯磨きの回数について、回答者全体では「2回」の割合が44.9%で最も高く「毎食後（3回）」の割合が40.7%、「1回」の割合が10.3%、「ほとんどしない」の割合が1.6%であった（図19-1）。

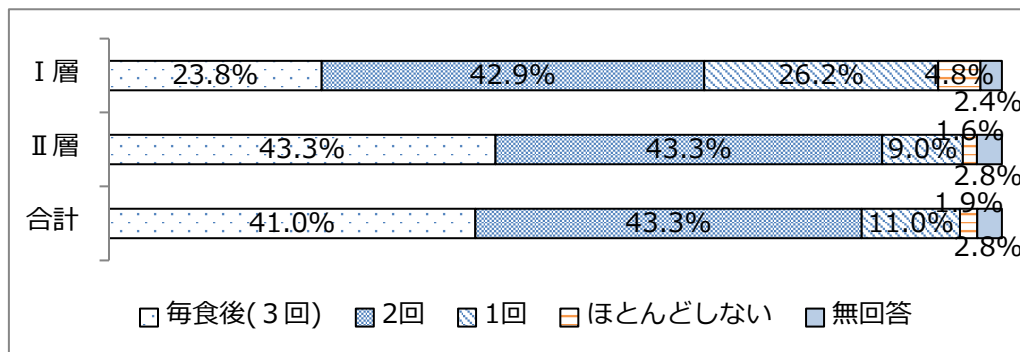
なお、小学校5年生の子どもと中学校2年生の子どもでは、小学校5年生の子どもで「毎食後（3回）」の割合が56.1%であるのに対し、中学校2年生の子どもで「毎食後（3回）」の割合が24.6%と低くなっており、小学校5年生の子どもで歯磨きの回数が多く、中学校2年生の子どもで少ない傾向があり、回答傾向に差異が見られた。

- ・経済状況別にⅠ層とⅡ層の間で差が大きい項目に着目すると、Ⅰ層で「毎食後（3回）」の割合が低く、「2回」までを合わせた割合も低くなっている（図19-2）。
- ・全世帯において自己実現の意識別で差が大きい項目に着目すると、「そう思う」層で「毎食後（3回）」の割合が高く、「2回」までを合わせた割合も高くなっている（図19-3）。

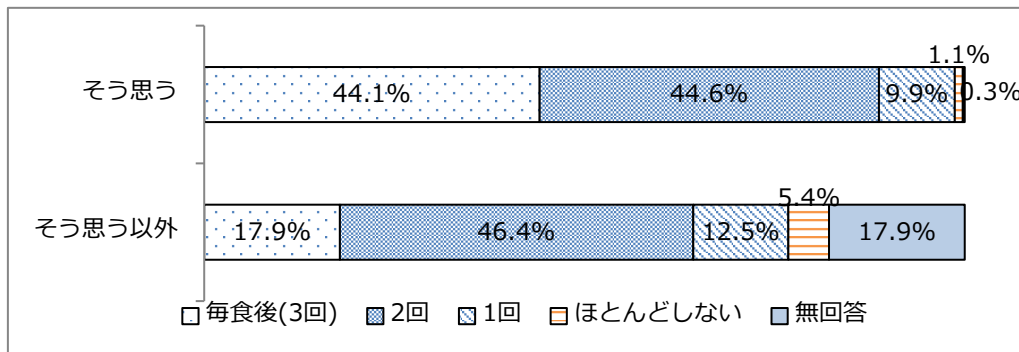
（図19-1・子ども調査票／問18）



（図19-2・同，経済状況別）



(図 19-3・同, 自己実現の意識別)



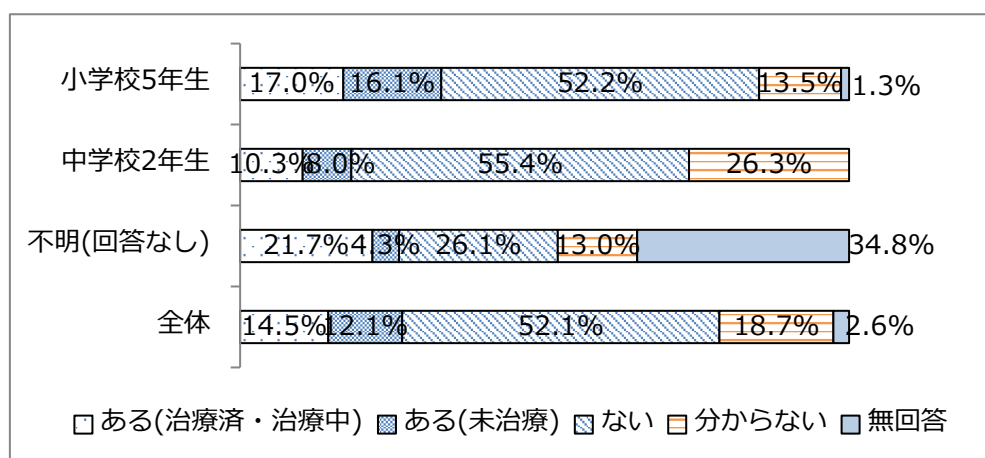
② 現在むし歯があるか

- ・回答者全体では、「ない」が 52.2%で最も高く、「ある（治療済・治療中）」が 17.0%、「ある（未治療）」が 16.1%、「分からない」が 13.5%の順に高くなっている。

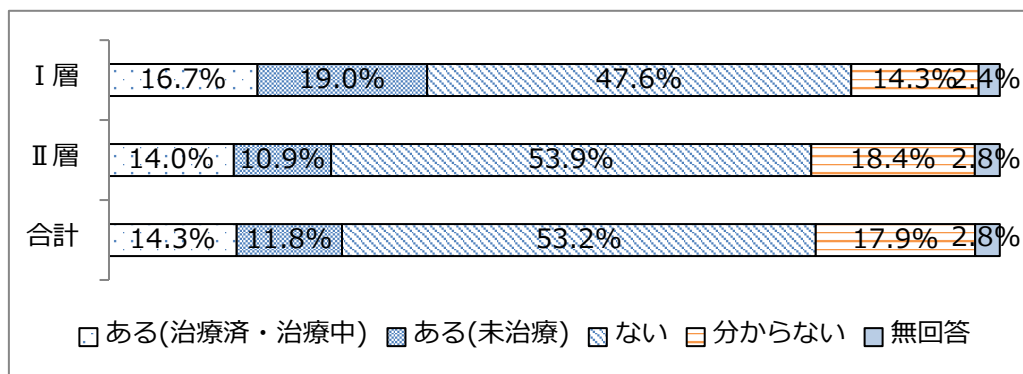
小学校 5 年生でむし歯になった割合が高く、中学校 2 年生で低い傾向があり、小学校 5 年生と中学校 2 年生の子どもとで回答傾向に差異が見られた。

- ・経済状況別にⅠ層とⅡ層の間で差が大きい項目に着目すると、Ⅰ層で「ある（未治療）」の割合が高く、「ない」の割合が低くなっており、問 18 の歯磨きの回数との相関が見られる。
- ・全世帯において自己実現の意識別で差が大きい項目に着目すると、「そう思う」層で「ない」の割合が高くなっている。また、「そう思う以外」層で「無回答」の割合が高くなっている。

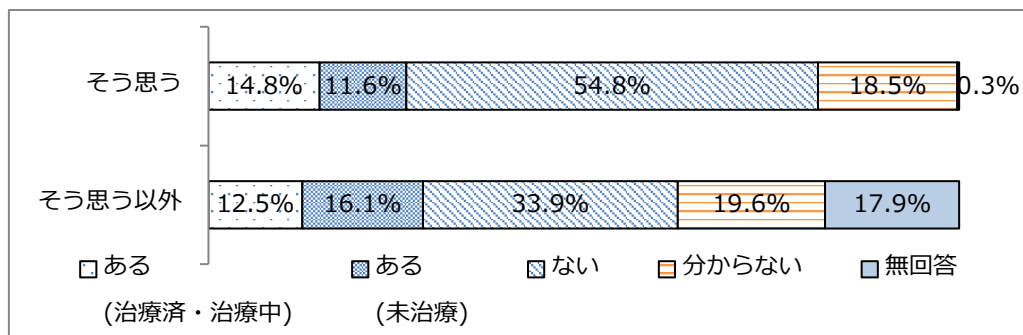
(図 20-1・子ども調査票/問 19)



(図 20-2・同, 経済状況別)



(図 20-3・同, 自己実現の意識別)



分析

- ・ 小学校 5 年生と中学校 2 年生では、中学校 2 年生の歯磨きの回数は小学校 5 年生の歯磨きの回数よりも少ない傾向があるが、むし歯があると回答している割合も低くなっている。一方で、中学校 2 年生ではむし歯があるか「わからない」の割合が高い。
- ・ また経済状況別や自己実現の意識別では、歯磨きの回数が少ない I 層及び「そう思わない」層でむし歯がある割合が高くなっている。
- ・ 以上より、概ね歯磨きの回数とむし歯がある割合に相関が見られた。

子どもが食事をする頻度

① 朝食を食べる頻度

- ・回答者全体では、「ほぼ毎日」が 86.7%で最も高く、「週に 4～5 日」が 6.8%、「週に 2～3 日」が 1.9%、「ほとんど食べない」が 1.9%、「週に 1 回程度」が 0.5%の順に高くなっている（図 21）。

朝食を食べない理由では、「空腹ではない」が 34.0%で最も高く、「食べる時間がない」が 31.9%、「分からない」が 8.5%、「用意されていない」が 6.4%、「食べる習慣がない」が 3.5%、「その他」が 2.1%の順に高くなっている。また、小学校 5 年生の子どもは「空腹ではない」の割合が最も高く、中学校 2 年生の子どもは「食べる時間がない」の割合が最も高いなど、小学校 5 年生と中学校 2 年生の子どもとで回答傾向に差異が見られた（図 22）。

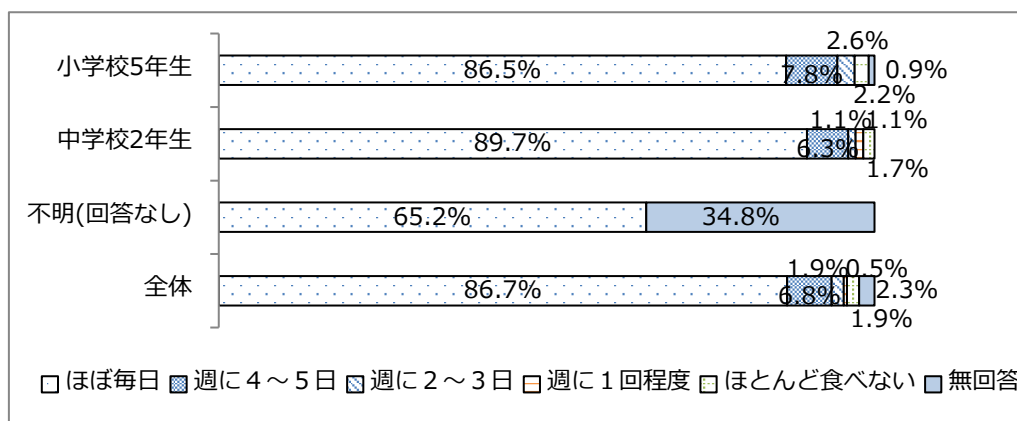
- ・経済状況別にⅠ層とⅡ層で差が大きい項目に着目すると、Ⅰ層で「ほぼ毎日」と「週に 4～5 日」を合わせた割合が低く、摂取頻度が低くなるにつれてⅠ層の割合が高くなっている（図 23）。

また、朝食を食べない理由について、経済状況別にⅠ層とⅡ層で差が大きい項目に着目すると、Ⅰ層で「用意されていない」、「分からない」の割合が高く、Ⅱ層で「食べる時間がない」の割合が高くなっている。（図 24）。

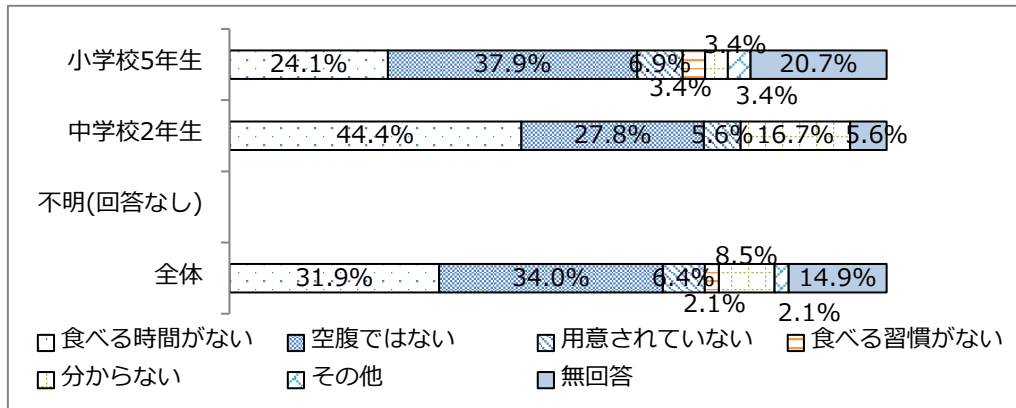
- ・自己実現の意識別で差が大きい項目に着目すると、「そう思う」層で「ほぼ毎日」の割合が高くなっている。また、「そう思う以外」層で「無回答」の割合が高くなっている（図 25）。

また、朝食を食べない理由について、自己実現の意識別で差が大きい項目に着目すると、「そう思う」層で「食べる時間がない」の割合が高く、「そう思う以外」層で「空腹ではない」、「無回答」の割合が高くなっている（図 26）。

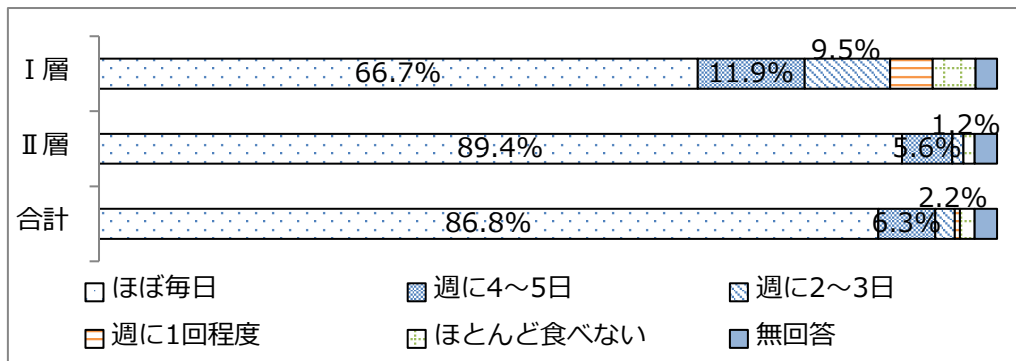
（図 21・子ども調査票／問 23-1）



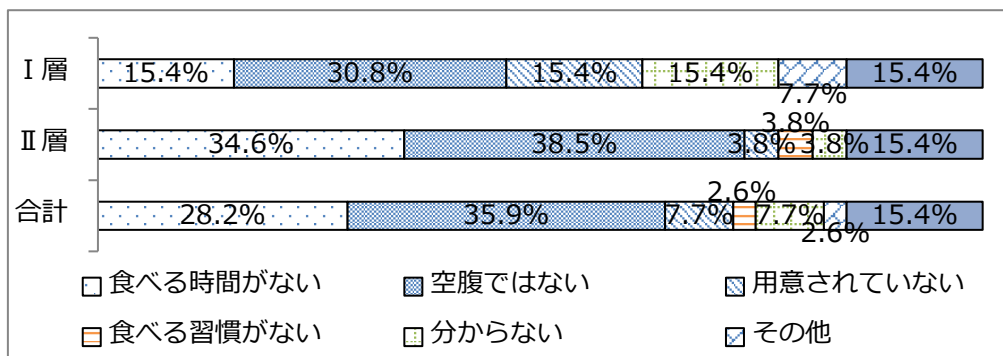
(図 22・子ども調査票／問 23-2)



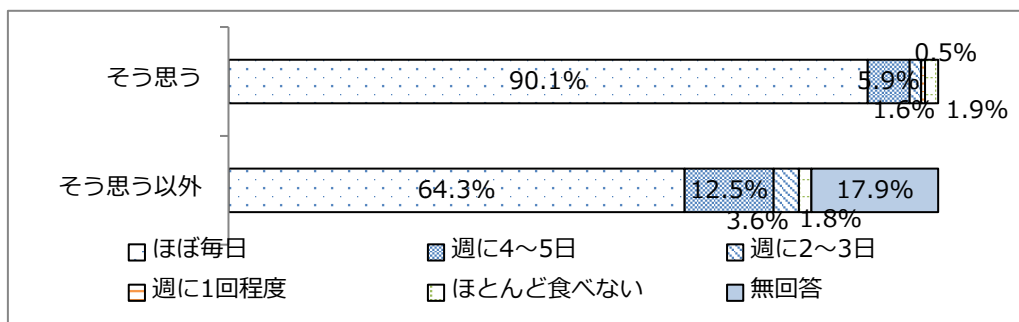
(図 23・子ども調査票／問 23-1, 経済状況別)



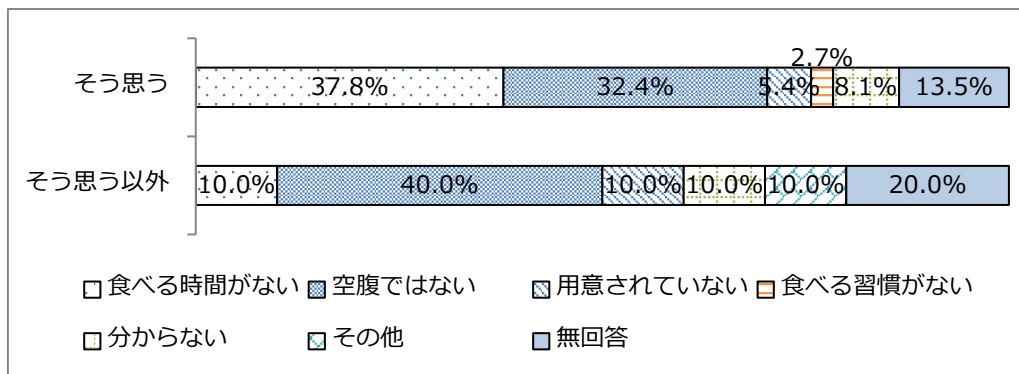
(図 24・子ども調査票／問 23-2, 経済状況別)



(図 25・子ども調査票／問 23-1, 自己実現の意識別)



(図 26・子ども調査票／問 23-2, 自己実現の意識別)



② 夕食を食べる頻度

- 回答者全体では、「ほぼ毎日」が 96.0%で最も高く、「週に 4～5 日」が 0.7%、「週に 2～3 日」が 0.2%、「ほとんど食べない」が 0.2%の順に高くなっている。「週に 1 回程度」は 0 件だった（図 27）。

夕食を食べない理由について、回答者全体では、「空腹ではない」が 60.0%で最も高く、「食べる習慣がない」が 20.0%、「分からない」が 20.0%の順に高くなっている。回答者が、小学校 5 年生で 3 人、中学校 2 年生で 2 人だったため、小学校 5 年生と中学校 2 年生の比較は難しい（図 28）。

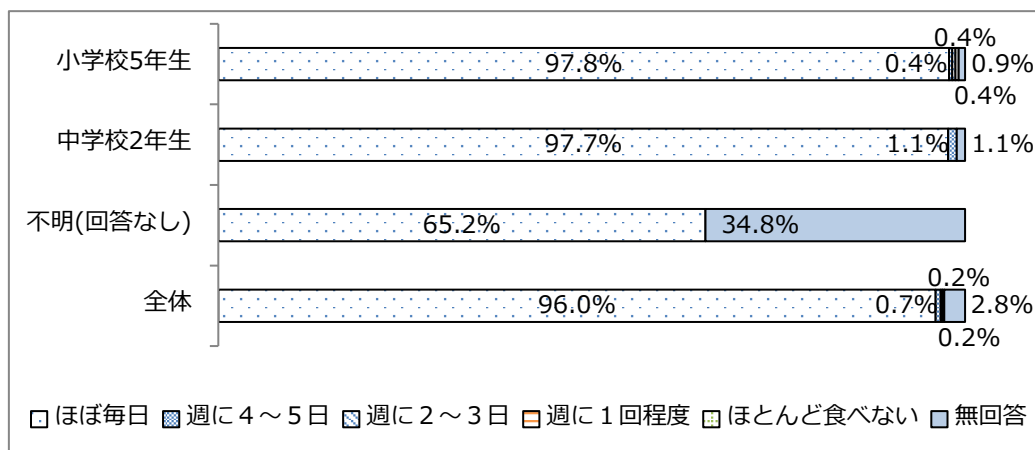
- 各項目において、経済状況別に顕著な差は見られなかった（図 29）。

夕食を食べない理由について、経済状況別にⅡ層では回答件数 3 件中すべてが「空腹ではない」と回答している。Ⅰ層では「食べる習慣がない」と「分からない」が各 1 件ずつの回答であった（図 30）。

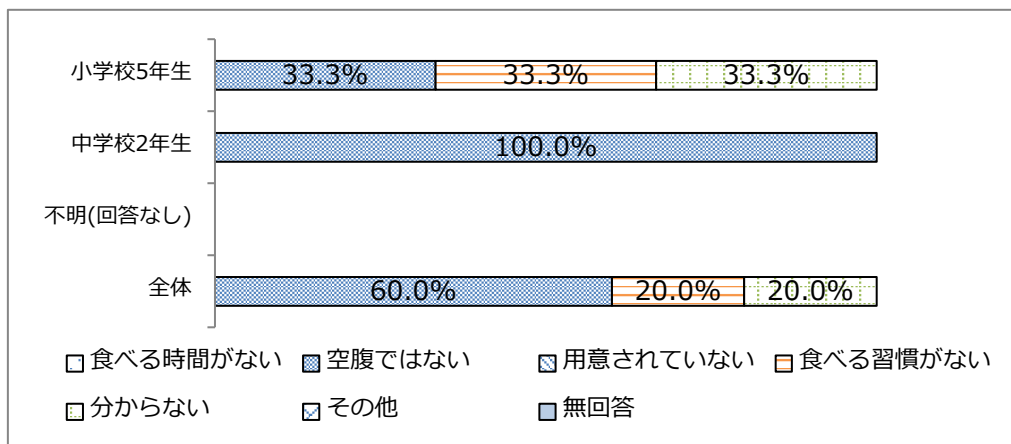
- 自己実現の意識別で差が大きい項目に着目すると、「そう思う」層で「ほぼ毎日」の割合が高くなっている。また、「そう思う以外」層で「無回答」の割合が高くなっている（図 31）。

夕食を食べない理由について、自己実現の意識別で、「そう思う以外」層では「空腹ではない」の回答が 1 件、「そう思う」層では「空腹ではない」の回答が 2 件、「食べる習慣がない」、「分からない」が各 1 件であった（図 32）。

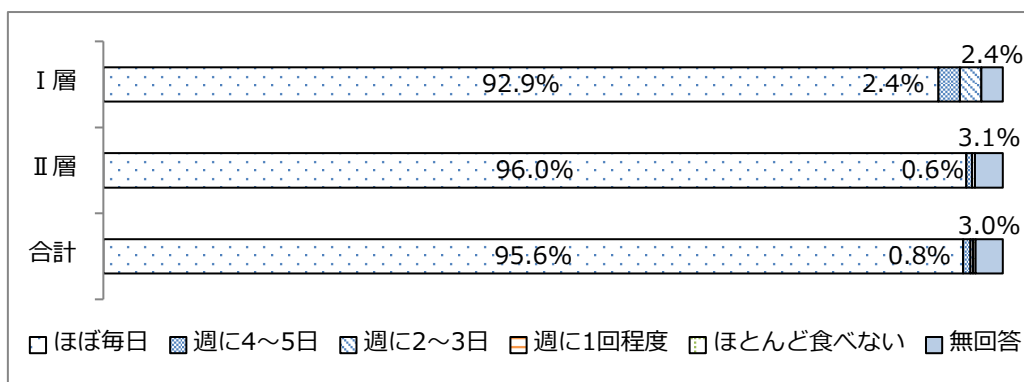
（図 27・子ども調査票/問 24-1）



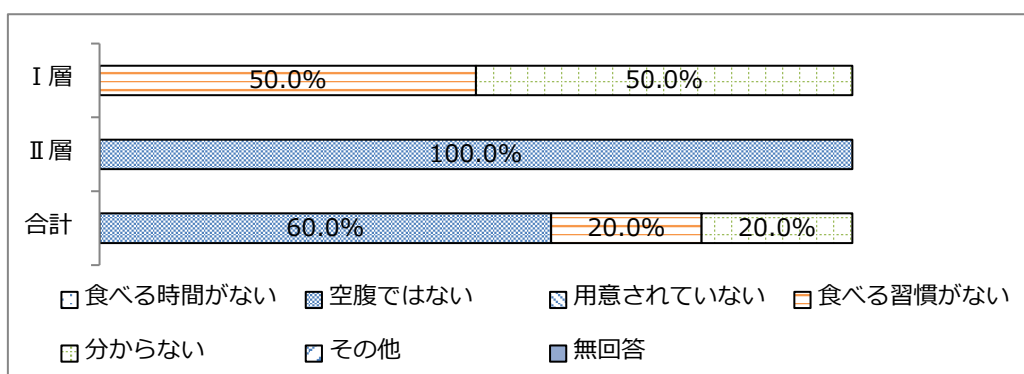
(図 28・子ども調査票/問 24-2)



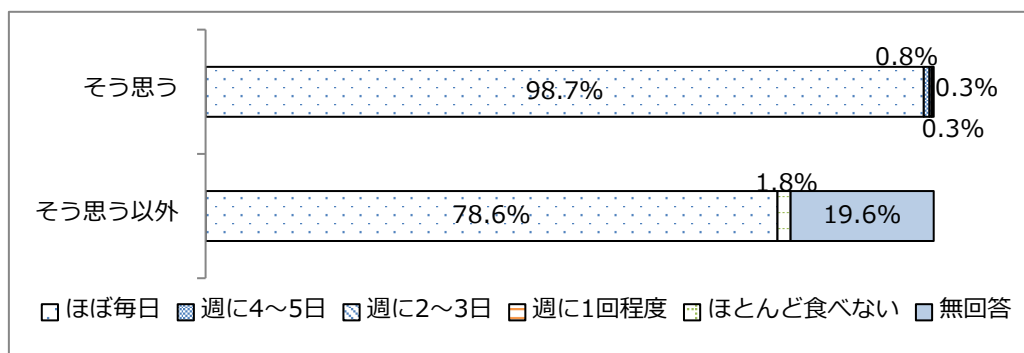
(図 29・子ども調査票/問 24-1, 経済状況別)



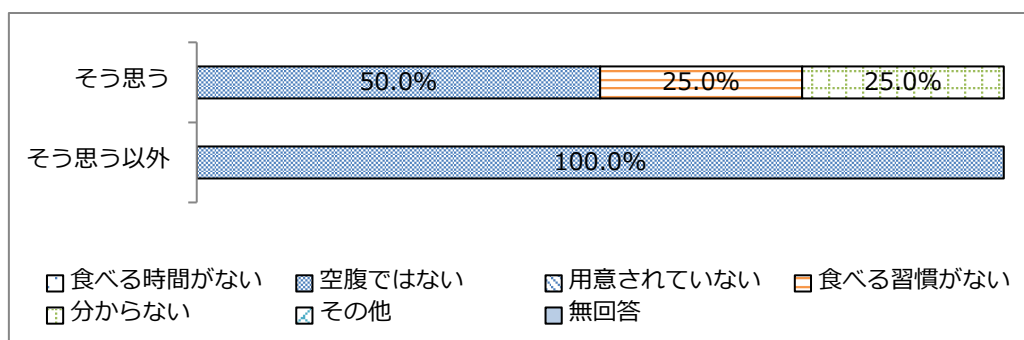
(図 30・子ども調査票/問 24-2, 経済状況別)



(図 31・子ども調査票/問 24-1, 自己実現の意識別)



(図 32・子ども調査票/問 24-2, 自己実現の意識別)



分析

- ・子どもが食事をする頻度について、朝食と夕食では朝食を食べる頻度が全体として低くなっている。夕食は、ほぼ毎日食べている割合が回答者全体及び経済状況別で9割以上であった。
- ・朝食を食べる頻度について、小学校5年生と中学校2年生では大きな差がみられなかったが、経済状況別にⅠ層とⅡ層で比較すると、Ⅰ層で朝食の摂取頻度が低くなっている。
- ・朝食を食べない理由は、全体で「空腹ではない」、「食べる時間がない」が高い割合となっている一方、経済状況別にみるとⅠ層では「用意されていない」や「分らない」がⅡ層よりも高い割合を示しており、世帯の経済状況が子どもの食事に影響していることが考えられる。
- ・また、自己実現の意識別にみると、朝食については「そう思う以外」層で、経済状況別のⅠ層と同じ傾向があらわれており、「そう思う」層と比べて摂取頻度が低い。夕食については、「そう思う以外」層で「ほぼ毎日」の割合が8割弱にとどまり、「無回答」の割合が高くなっている。
- ・よって、自己実現の意識と食事に対する意欲も相互に影響している可能性が考えられる。

保護者と一緒に食事をする頻度

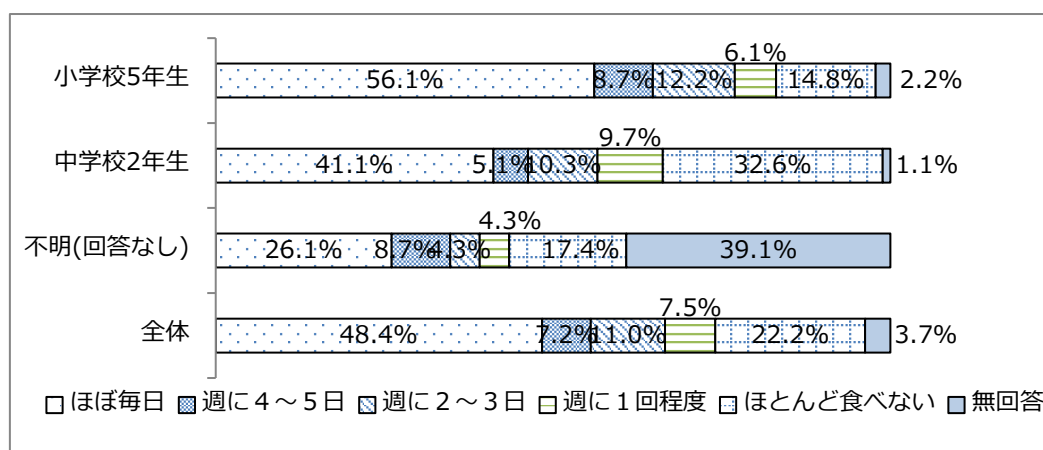
① 保護者と一緒に朝食を食べる頻度

- ・回答者全体では、「ほぼ毎日」が 48.4% で最も高く、「ほとんど食べない」が 22.2%、「週に 2～3 日」が 11.0%、「週に 1 回程度」が 7.5%、「週に 4～5 日」が 7.2% の順に高くなっている（図 33-1）。

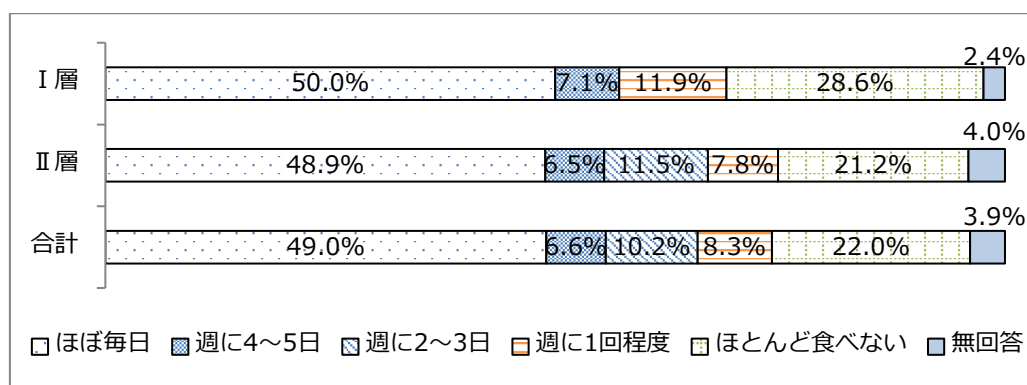
また、小学校 5 年生で高く、中学校 2 年生で低くなっており、小学校 5 年生と中学校 2 年生の子どもとで回答傾向に差異が見られた。

- ・経済状況別に I 層と II 層の間で差が大きい項目に着目すると、I 層で「ほとんど食べない」の割合が高くなっている（図 33-2）。
- ・自己実現の意識別にみると、保護者との朝食の摂取頻度が高いほど、子どもの自己実現の意識が高くなっている（図 33-3）。

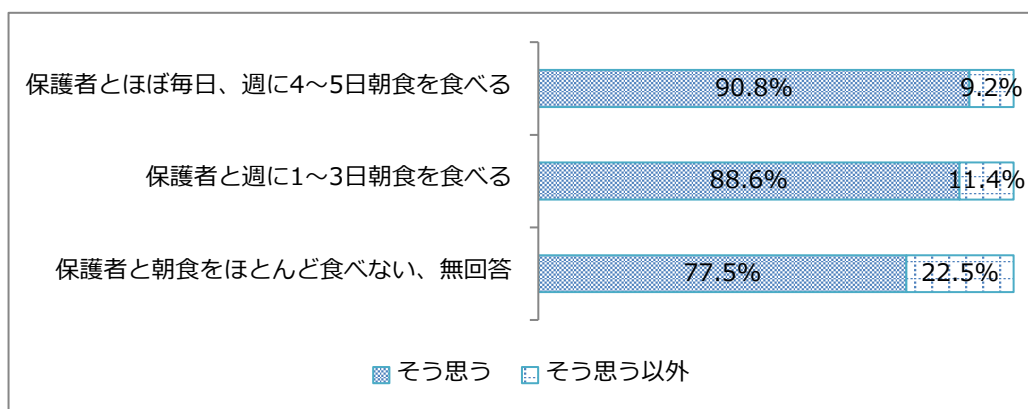
（図 33-1・子ども調査票/問 25）



（図 33-2・同，経済状況別）



(図 33-3・同, 自己実現の意識別)



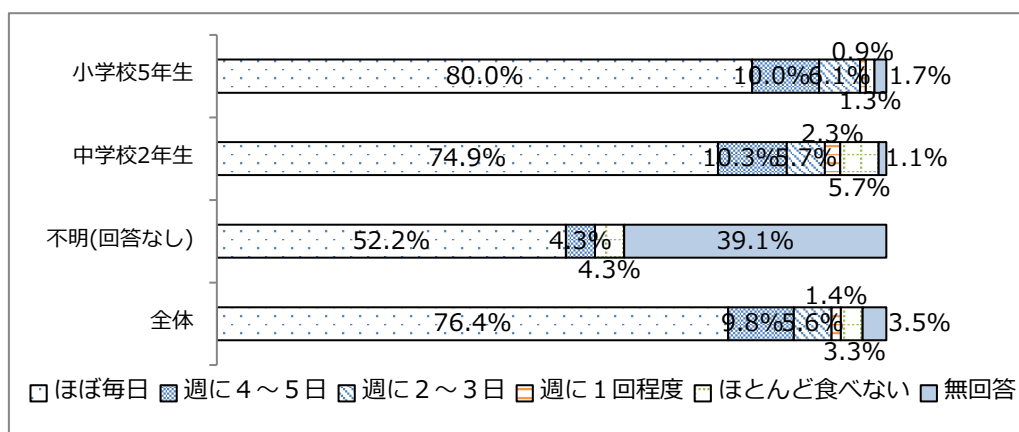
② 保護者と一緒に夕食を食べる頻度

- ・回答者全体では、「ほぼ毎日」が 76.4%で最も高く、「週に 4～5 日」が 9.8%、「週に 2～3 日」が 5.6%、「ほとんど食べない」が 3.3%、「週に 1 回程度」が 1.4%の順に高くなっている (図 34-1)。

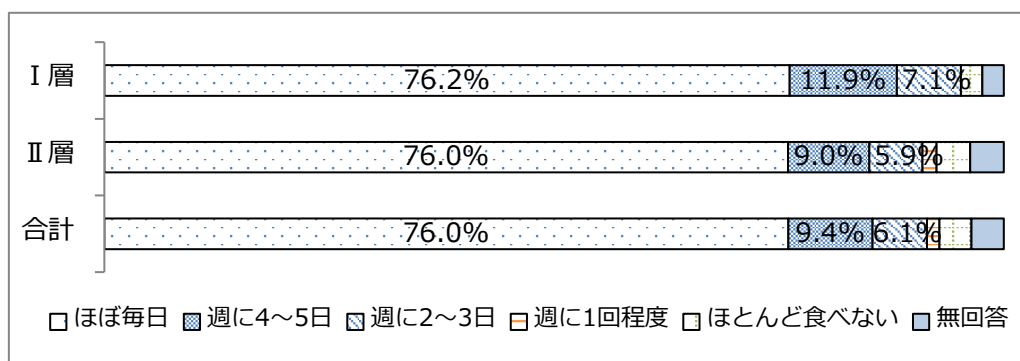
小学校 5 年生と中学校 2 年生では、大きな差は見られなかった。

- ・経済状況別にⅠ層とⅡ層の間で差が大きい項目に着目すると、各項目において顕著な差はみられなかった (図 34-2)。
- ・自己実現の意識別にみると、保護者との夕食の摂取頻度が高いほど、子どもの自己実現の意識が高くなっている (図 34-3)。

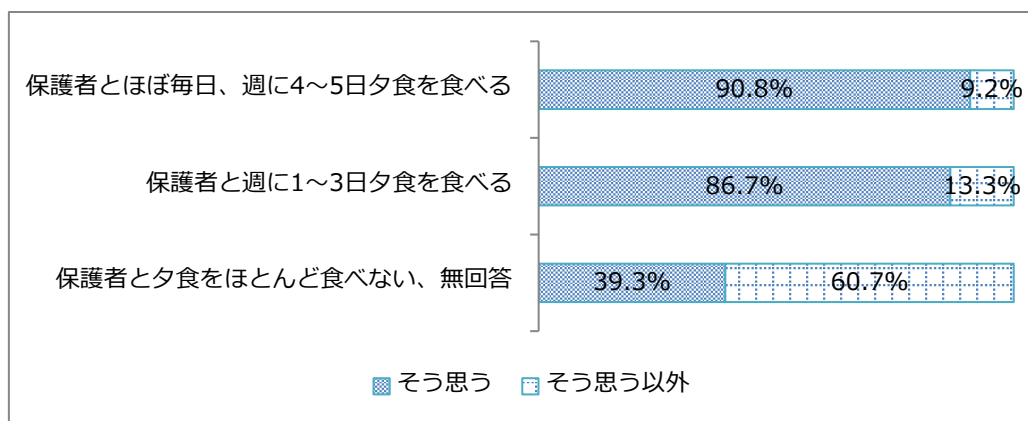
(図 34-1・子ども調査票/問 26)



(図 34-2・同，経済状況別)



(図 34-3・同，自己実現の意識別)



分析

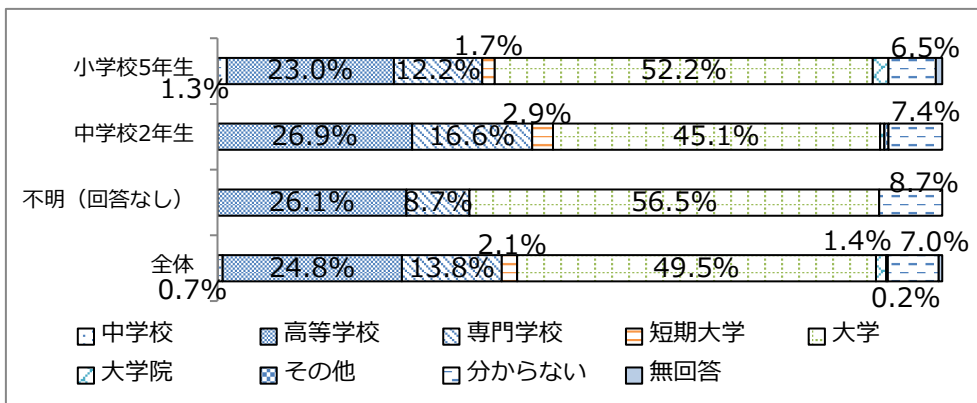
- ・ 小学校 5 年生と中学校 2 年生では，中学校 2 年生で保護者と一緒に食事をする頻度が低くなっている。
- ・ 朝食では経済状況別に I 層で保護者と一緒に食べる頻度が低くなっており，夕食では経済状況別に各項目の差は見られないなど，問 23-1 及び問 24-1 の朝食や夕食を食べる頻度との相関がみられる。
- ・ また自己実現の意識別では，朝食と夕食ともに保護者と一緒に食事をとっている子どもの自己実現の意識が高くなっている傾向が見られた。

3. 教育環境

<子どもの進学について>

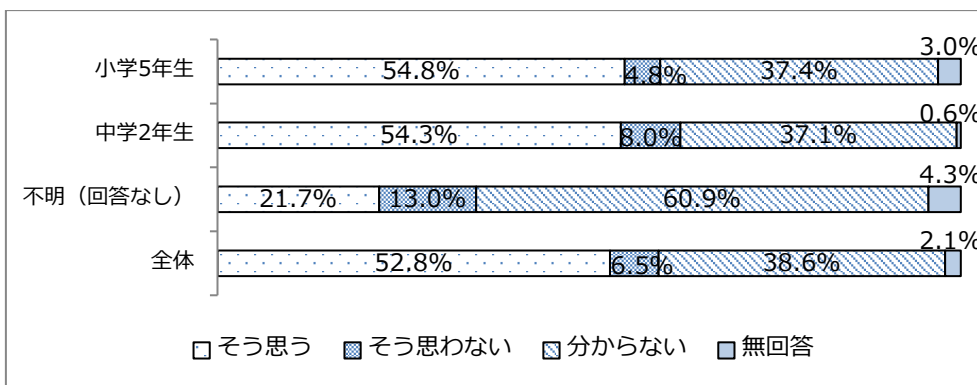
・回答者全体では、保護者の 5 割程度が「大学～大学院」まで進学させたいと希望している（図 35）。

（図 35・保護者調査票/問 8）



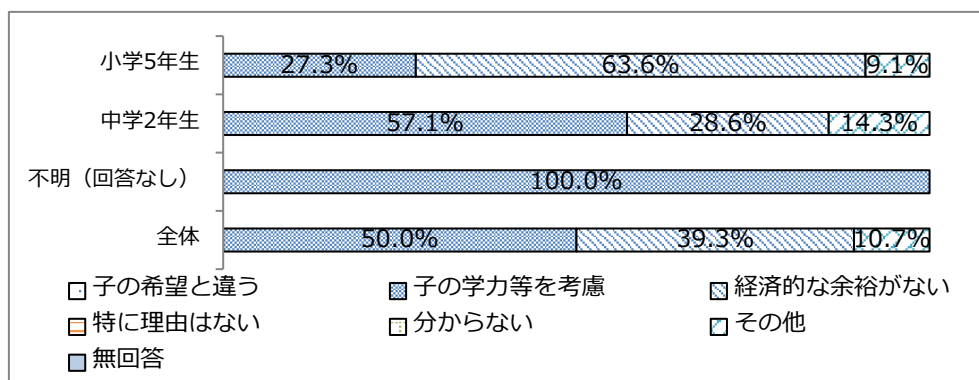
・問 8 で回答した希望通りに子どもが進学できそうだと考えている割合は 5 割程度、そう思わない割合は 1 割弱程度であった（図 36）。

（図 36・保護者調査票/問 9-1）



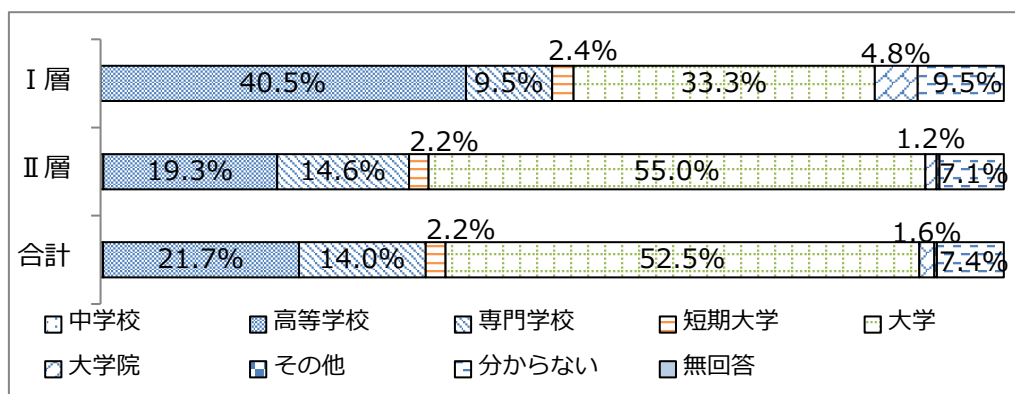
・ そう思わない（子どもが保護者の希望どおりに進学できると思わない）理由は、回答者全体では「子の学力等を考慮」の割合が 50.0%、「経済的な余裕がない」の割合が 39.3%、「その他」の割合が 10.7%であった（図 37）。「子の希望と違う」、「特に理由はない」及び「分からない」の 3 項目で該当者が見られなかった。

（図 37・保護者調査票／問 9－2）



・ 経済状況別にⅠ層とⅡ層の差が大きい項目に着目すると、Ⅰ層で「高等学校」の割合が高く、Ⅱ層で「大学」の割合が高くなっている（図 38）。問 8 の希望通りに進学できないと思う、と回答したのはⅠ層で 2 件、Ⅱ層で 23 件であった（表 2）。Ⅰ層の 2 件について、希望通りに進学できないと考える理由は、いずれも「経済的な余裕がない」である（図 39）。

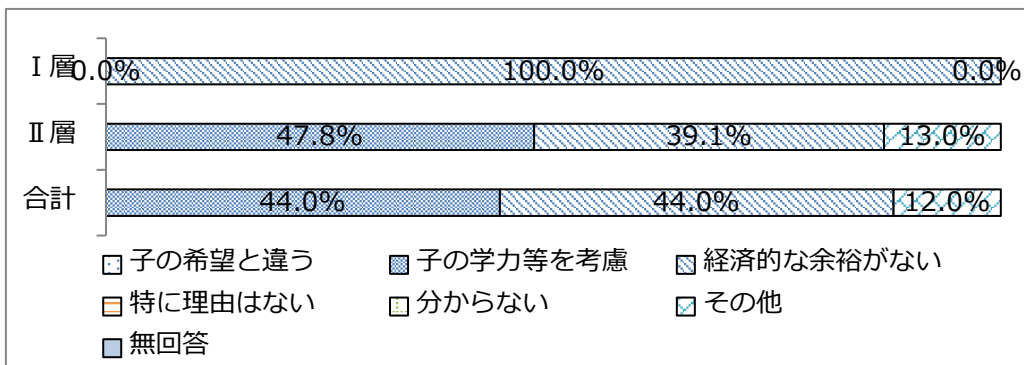
（図 38・保護者調査票／問 8，経済状況別）



(表 2・保護者調査票／問 9-1, 経済状況別)

	そう思う		そう思わない		分からない		無回答		計	
	件数	割合	件数	割合	件数	割合	件数	割合	件数	割合
I 層	16	38.1%	2	4.8%	23	54.8%	1	2.4%	42	100%
II 層	175	54.3%	23	7.1%	118	36.6%	6	1.9%	322	100%
合計	191	52.5%	25	6.9%	141	38.7%	7	1.9%	364	100%

(図 39・保護者調査票／問 9-2, 経済状況別)

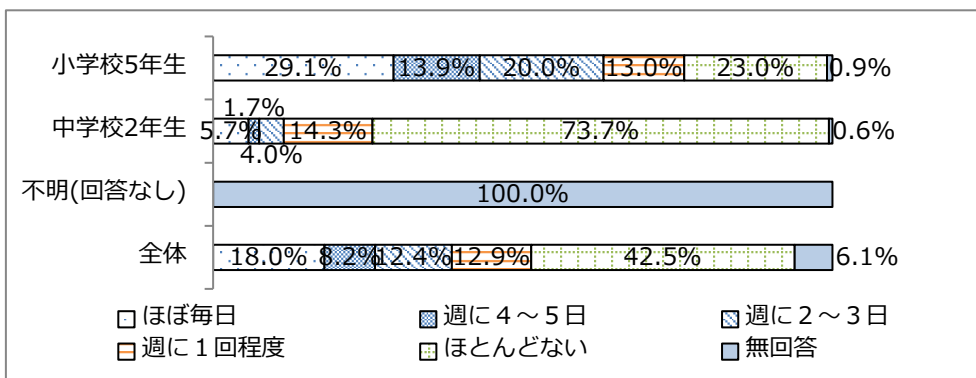


<子どもが保護者に宿題（勉強）を見てもらう頻度>

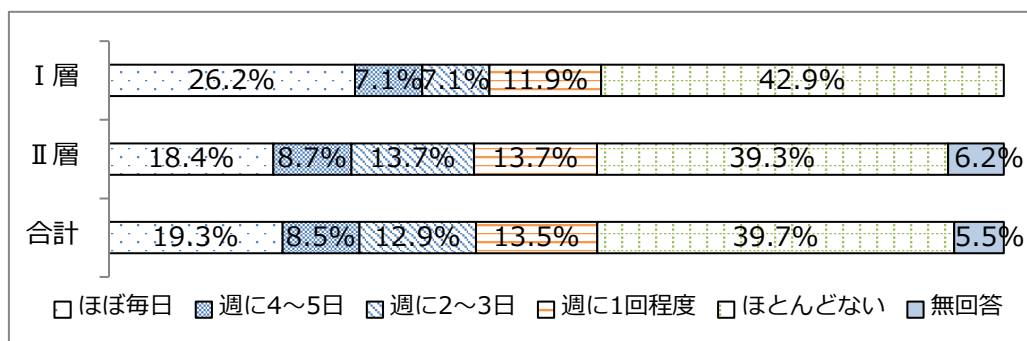
・回答者全体では、「ほとんどない」が 42.5%で最も高く、「ほぼ毎日」が 18.0%、「週に 1 回程度」が 12.9%、「週に 2～3 日」が 12.4%、「週に 4～5 日」が 8.2%の順に高くなっている（図 40-1）。回答者の 2 割強程度が「ほぼ毎日、週に 4～5 日」、2 割強程度が「週に 1～3 日」、4 割程度が「ほとんどない」であり、「ほとんどない」以外の割合が 5 割を超えている。

・経済状況別に I 層と II 層で差が大きい項目に着目すると、I 層で「ほぼ毎日」の割合が高くなっている一方、「ほとんどない」の割合も高くなっている。また、II 層で「ほぼ毎日」の割合が低くなっている（図 40-2）。

(図 40-1・子ども調査票／問 3)



(図 40-2・子ども調査票／問 3，経済状況別)

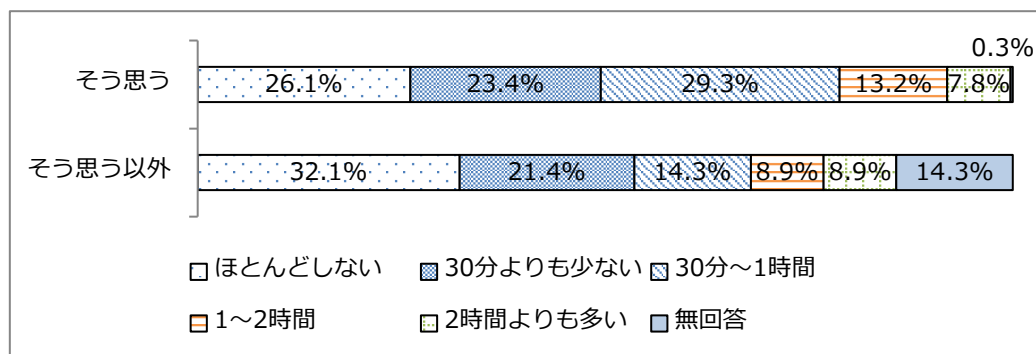


<子どもの読書時間>

・子どもが週にどのくらい読書をするかについて、全世帯において自己実現の意識別で差が大きい項目に着目すると、「そう思う以外」層で「ほとんどしない」の割合が高く、30～2時間の割合が低くなっている（図 41-1）。概ね読書時間が長くなるにつれて「そう思う以外」層の割合が低くなっているが、「2時間よりも多い」の項目では、「そう思う以外」層の割合が高くなっている。

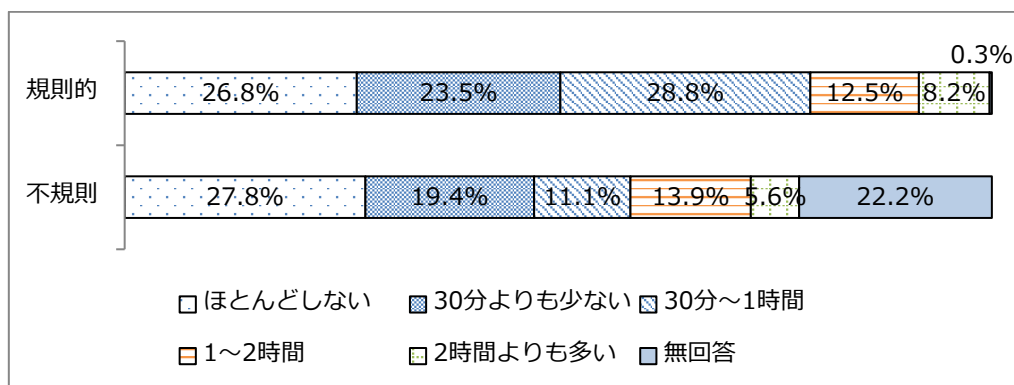
・また、全世帯において規則的な起床習慣別³で差が大きい項目に着目すると、「不規則」層で「30分～1時間」の割合が低くなっている一方、1～2時間以上では、「規則的」層と「不規則」層でほとんど差は見られなかった（図 41-2）。

(図 41-1・子ども調査票／問 6，自己実現の意識別)



³ 調査票（子ども）問 20「平日は、ほぼ同じ時刻に起きているか」について、「ほぼ同じ時刻に起きている」と「どちらかと言えば同じ時刻に起きている」の回答者を『規則的』に分類し、それ以外の回答者を『不規則』に分類（以下、同じ）。

(図 41-2・同上, 規則的な起床習慣別)



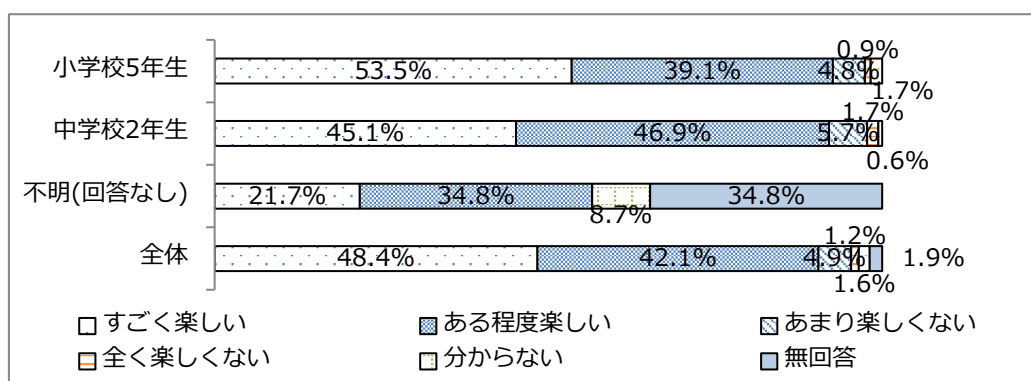
<学校が楽しいかどうか>

・回答者全体では、「すごく楽しい」が 48.4%で最も高く、「ある程度楽しい」が 42.1%、「あまり楽しくない」が 4.9%、「分からない」が 1.6%、「全く楽しくない」が 1.2%の順に高くなっている（図 42-1）。このことから回答者の 9 割程度が「楽しい」、1 割弱程度が「楽しくない」であった。

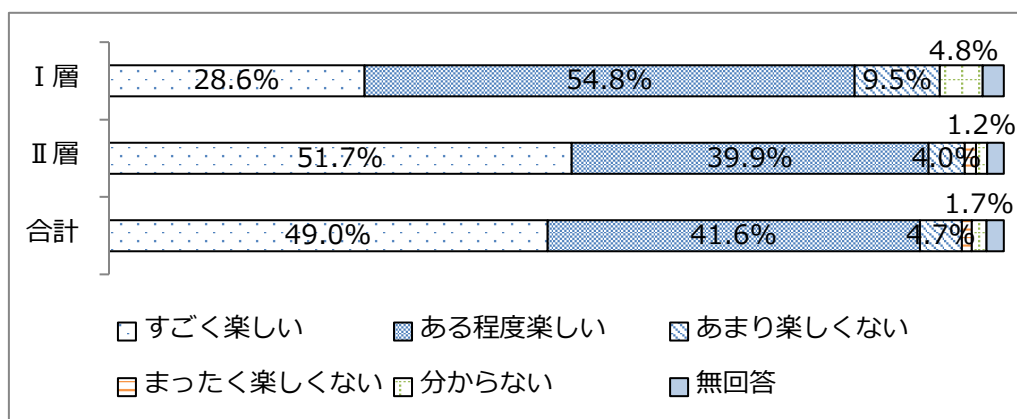
・なお、小学校 5 年生の子どもは、「すごく楽しい」が 53.5%で最も高く、次いで「ある程度楽しい」が 39.1%の順に高くなっているのに対し、中学校 2 年生の子どもは、「ある程度楽しい」が 46.9%で最も高く、次いで「すごく楽しい」が 45.1%の順に高く、小学校 5 年生の子どもと中学校 2 年生の子どもとで回答傾向に差異が見られた。

・経済状況別にⅠ層とⅡ層で差が大きい項目に着目すると、Ⅰ層で「すごく楽しい」の割合が低くなっている（図 42-2）。

(図 42-1・子ども調査票／問 7-1)



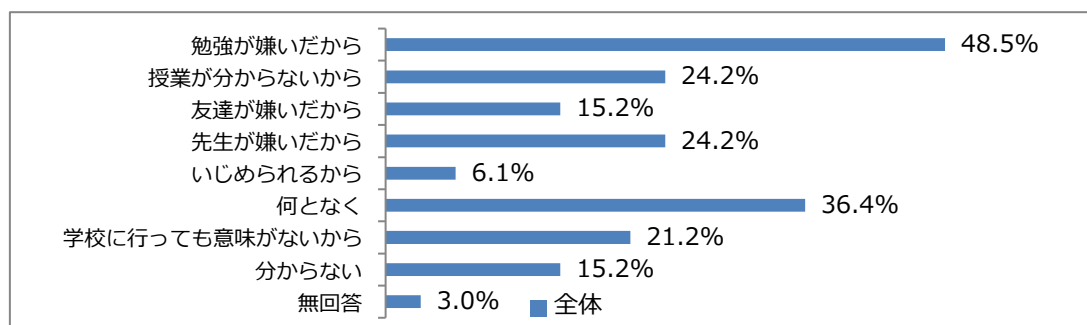
(図 42-2・子ども調査票／問 7-1, 経済状況別)



・また、上記設問において学校が「あまり楽しくない」、「まったく楽しくない」、「分からない」と回答した子どもについて、その理由は、回答者全体では、「勉強が嫌いだから」が 48.5%で最も高く、「何となく」が 36.4%、「先生が嫌いだから」が 24.2%、「授業が分からないから」が 24.2%、「学校に行っても意味がないから」が 21.2%の順に高くなっている（図 43）。

・なお、小学校 5 年生の子どもでは上位 5 項目のうちに「友達が嫌いだから」が 17.6%で入っているが、中学校 2 年生の子どもでは「友達が嫌いだから」が 14.3%で上位 5 項目に入っていない（表 3）。

(図 43・子ども調査票／問 7-2)

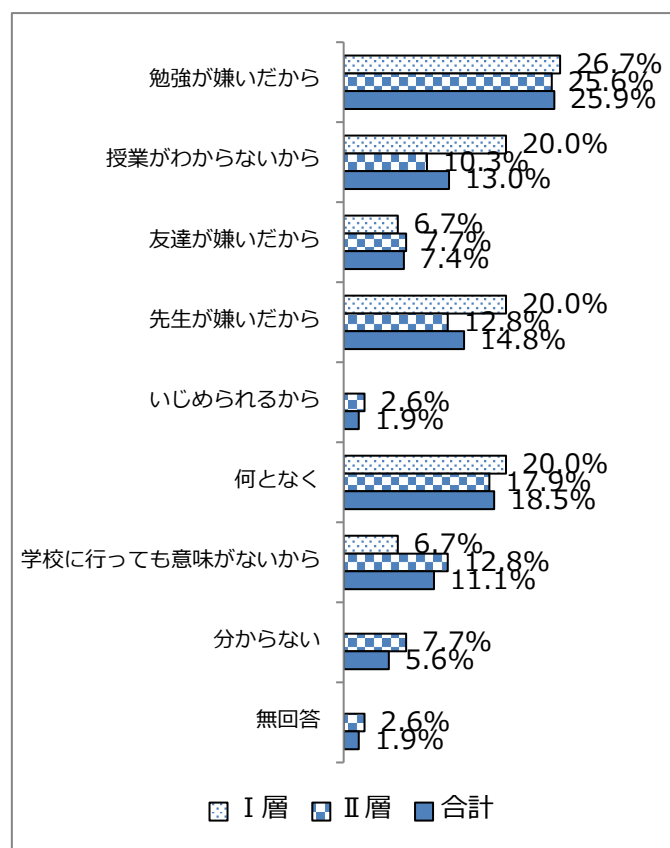


(表 3・子ども調査票／問 7-2)

	小学校5年生		中学校2年生		不明(回答なし)		全体	
	件数	割合	件数	割合	件数	割合	件数	割合
勉強が嫌いだから	9	52.9%	7	50.0%	0	0.0%	16	48.5%
授業が分からないから	3	17.6%	5	35.7%	0	0.0%	8	24.2%
友達が嫌いだから	3	17.6%	2	14.3%	0	0.0%	5	15.2%
先生が嫌いだから	0	0.0%	8	57.1%	0	0.0%	8	24.2%
いじめられるから	2	11.8%	0	0.0%	0	0.0%	2	6.1%
何となく	4	23.5%	6	42.9%	2	100.0%	12	36.4%
学校に行っても意味がないから	1	5.9%	6	42.9%	0	0.0%	7	21.2%
分からない	1	5.9%	2	14.3%	2	100.0%	5	15.2%
無回答	1	5.9%	0	0.0%	0	0.0%	1	3.0%
計	17		14		2		33	

・経済状況別にⅠ層とⅡ層で差が大きい項目に着目すると、Ⅰ層で「授業が分からないから」、「先生が嫌いだから」の割合が高く、Ⅱ層で「学校に行っても意味がないから」の割合が高くなっている（図 44）。

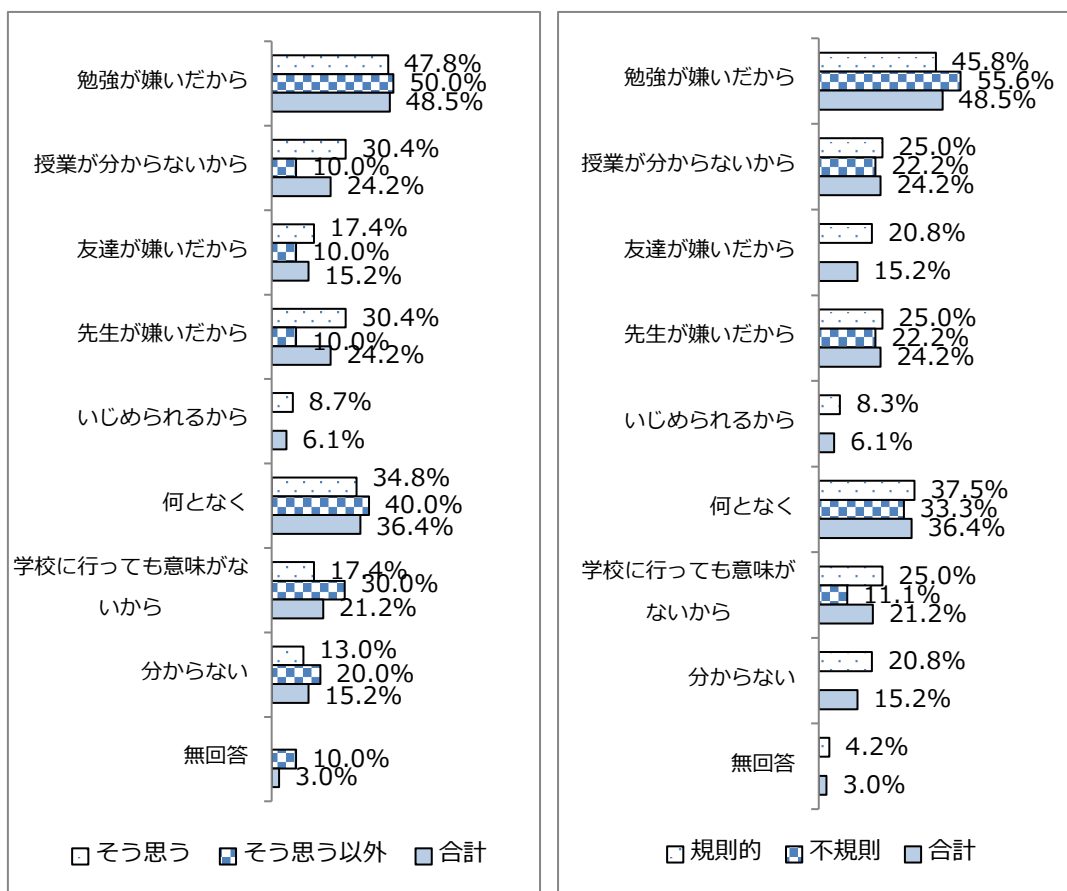
(図 44・子ども調査票／問 7-2, 経済状況別)



・更に、全世帯において自己実現の意識別及び規則的な起床習慣別で差が大きい項目に着目すると、「そう思う以外」層で「学校に行っても意味がないから」、「分からない」、「無回答」の割合が高く、「そう思う」層で「授業が分からないから」、「友達が嫌いだから」、「いじめられるから」、「先生が嫌いだから」の割合が高くなっている。(図 45-1)。

規則的な起床習慣別では、「不規則」層で「勉強が嫌いだから」の割合が高く、「規則的」層で「学校に行っても意味がないから」、「友達が嫌いだから」、「分からない」の割合が高くなっている。(図 45-2)。

(図 45-1・子ども調査票／問 7-2, 自己実現の意識別) (図 45-2・同, 規則的な起床習慣別)



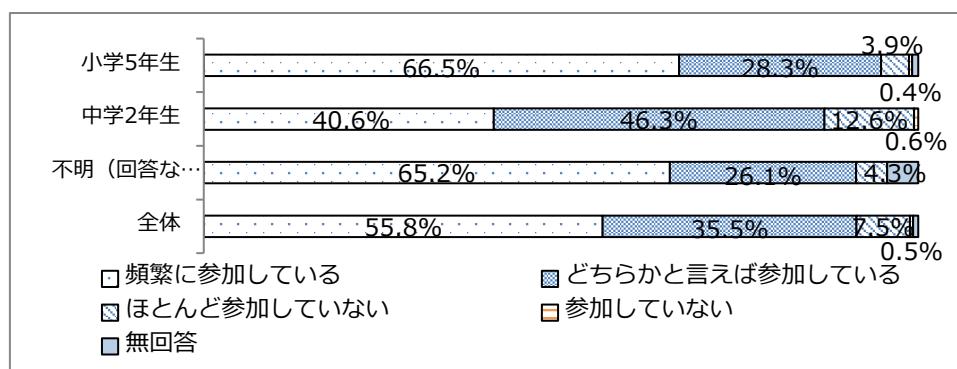
4. 社会環境

<保護者の学校行事への参加頻度>

・授業参観や運動会など，子どもの学校行事に参加する頻度は，回答者全体では「頻繁に参加する」の割合が 55.8%，「どちらかと言えば参加している」の割合が 35.5%，「ほとんど参加していない」の割合が 7.5%，「参加していない」の割合が 0.5%であった（図 46）。

なお，小学校 5 年生の保護者と中学校 2 年生の保護者では，小学校 5 年生の保護者で「頻繁に参加している」の割合が 66.5%，「どちらかと言えば参加している」の割合が 28.3%の順に高くなっているのに対し，中学校 2 年生の保護者では「どちらかと言えば参加している」の割合が 46.3%，「頻繁に参加している」の割合が 40.6%の順に高く，中学校 2 年生の保護者の参加頻度が低くなっている。

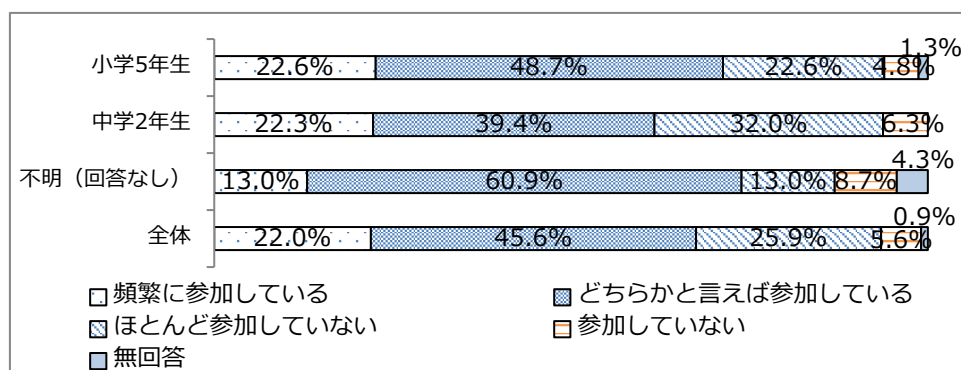
（図 46・保護者調査票／問 10）



<保護者の地域行事への参加頻度>

・回答者全体では、「どちらかと言えば参加している」が 45.6%で最も高く、「ほとんど参加していない」が 25.9%、「頻繁に参加している」が 22.0%、「参加していない」が 5.6%の順に高くなっている(図 47)。「ほとんど参加していない」、「参加していない」を合わせた割合が 31.5%であり、参加していない割合が高くなっている。

(図 47・保護者調査票／問 11)

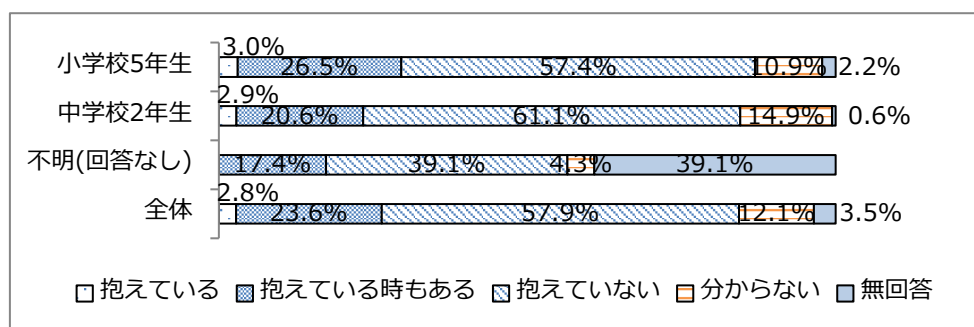


<子どもが自分だけでは解決することが難しい大きな悩みを抱えているか>

・回答者全体では、3 割弱程度が「抱えている、抱えている時もある」、6 割弱程度が「抱えていない」であった(図 48)。

なお、中学校 2 年生に比べ小学校 5 年生の方が、悩みを抱えている割合が高く、小学校 5 年生と中学校 2 年生の子どもとで回答傾向に差異が見られた。

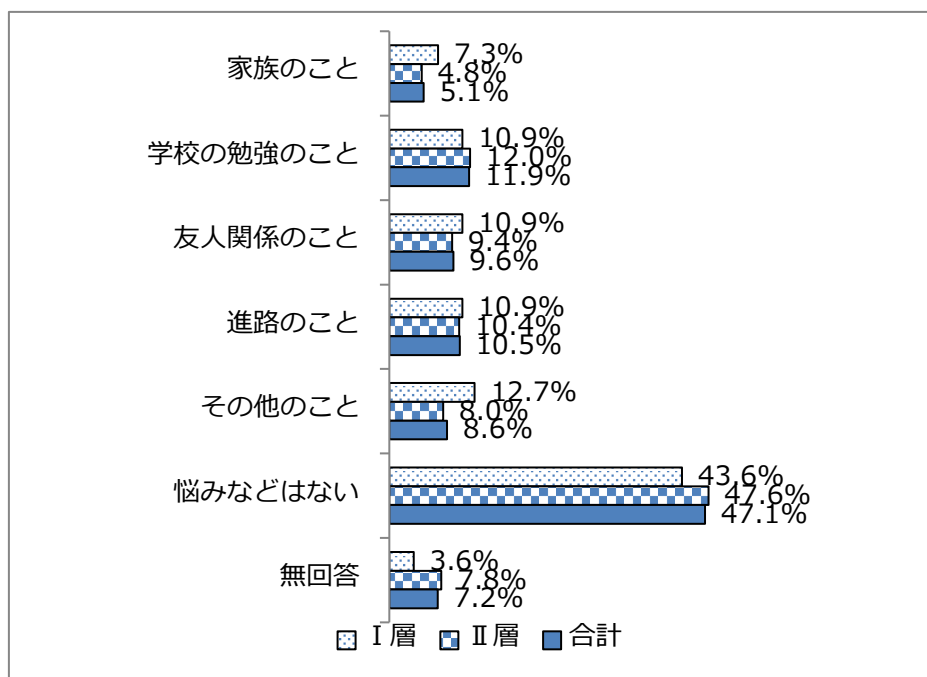
(図 48・子ども調査票／問 31)



<子どもが今悩んでいる事や心配な事、困っている事や誰かに相談したいと思っていること>

・経済状況別にⅠ層とⅡ層で差が大きい項目に着目すると、Ⅰ層で「その他のこと」の割合が高く、「悩みなどはない」の割合が低くなっている（図 49）。

（図 49・子ども調査票／問 33，経済状況別）



Ⅳ まとめ

・本調査において、子どもの生活、特に学習や基礎的な生活習慣における面で、世帯の経済状況による影響がみられた。

・世帯の経済状況について、世帯の所得合計と父母の就業状況とを照らしてみると、Ⅰ層では非正規社員の割合が高く、Ⅱ層では正社員の割合が高くなっていた。また、Ⅰ層では、Ⅱ層と比較して、父母の学歴で中学校卒業の割合が高くなっていた。これらのことから、学歴によって就業状況に違いが生じ、ひいては世帯の所得合計の高低差があらわれていると考えられる。

つまり、学歴と就業状況、所得は相関関係にあり、はじめに述べたように子どもの学習環境にも影響が及んでいる。

・子どもの学習環境について、Ⅰ層の子どもでは、経済的な理由により塾や習い事に通うことができなかったという割合が、Ⅱ層の子どもよりも高かった。これは世帯の経済状況が、子どもの学習活動等に取り組む機会を減らしてしまっている一例といえるだろう。

Ⅰ層の子どもでは、学習やスポーツ等に対する意欲、すなわち自己実現の意識が低い傾向にあった。学習環境が整わないために意欲が出ない、意欲が湧いても機会が得られなかったために低下してしまった、という連環があるのではないだろうか。

・学習環境の充実を図るには、生活環境が整っていることが前提となる。食事に関する設問では、朝食や夕食をきちんと食べている子どもが、食べる頻度が少ない子どもよりも自己実現の意識が高かった。更に、保護者と一緒に食事をする子どもが、保護者と一緒に食事をしない子どもよりも自己実現の意識が高いという結果が得られた。睡眠時間については、自己実現の意識が高い子どもは7時間以上の睡眠時間を取っている割合が高かった。

つまり、食事や睡眠といった基礎的な生活習慣が健康的に維持されている子どもほど、自己実現の意識が高くなっている。子どもの生活環境は、当然ながら保護者の生活と密接に関わっている。Ⅰ層の子どもで自己実現の意識が低いことの背景には、保護者の仕事の都合等により、子どもの生活リズムまでもが崩れてしまっている状況が一因としてあるのではないかと推測される。

・以上より、子どもの生活には世帯の経済状況が影響している側面がみられ、いわゆる「貧困の連鎖」を生じさせないための対策が必要と考えられる。市としては、保護者に対する就労支援等を引き続き行っていくことはもとより、子どもたちに対する学習支援を充実させる等、子どもたちの生活や将来への意欲の全体的な向上を図ることが必要であると考えられる。